



徳川實紀資料

特別
リ5
3072
1

二
十
五



門外甲5
3.072
16



一 昨十日新井氏に在りて此を在る一冊半清浄法
 私に以て清浄法を以てしるは其の由りては其の
 之を以てするも氣分お滞りて尤も花を有しては振藥
 もしるは其の續中にも解麻痺は是れ其の氣配持
 害はしるは其の私に以ては其の由りては其の
 痺を以てして一且之は其の由りては其の
 之は其の氣配持と其の由りては其の
 成来長し其の用清浄法を成りては其の
 其の由りては其の由りては其の由りては其の

以旅にとも相談に後を自為する一に調正越私
死出に二母族上する相海に後を左を宿に私立
書通するに後後難は一日美歳とるに通に詔
國に械智古來に例を考一にトトシ作
先する法にト不に事る遂會後トも辰成事ト
少し未沢成美ハ沖姫に左 上ハ私 仲トハ
領下トクト上執之ト一、書立にる會後以る史シ
ト後ト末ニ委細書付老中諸役人詰玉トトシ
ト後トハ今度朝鮮來聘に後ト付にるも多鶴成

事にハ信傳ちく其之ハ文勤ちくハ其信傳仕ハ
以之事に筋未沢に門トクヤ外也トト知中
根成事にハ左何も一人に先相勤ト申事ハ
于神居迎度とある 上ハ其相子ニ私成儀
子ニお申中ハ沖藏光と申く其行ハ詔役人ニ
渡り度海ト後 由兼代杯大根にるにそれと少成
之理を申して私 仰ち申事ハ沖姫にハ左信也
かも理と云々ハ其根ハ沖自身沖勤に成ハ 上ハ
ハ也ト云ハ私共理分は用於此也ト云ハ其方ハ

少も休息仕へん其之々多中私中ハ亦苦勞
子兼成事ニ事好ハ其由委任故抱ハハ御勤
由瑞由正御勤成成より方有之ハ其由正續
成ニ事好ハ先以君臣御勤政ハ後天下ニ事
ト事好ハ私ニ亦同多事親ハ稜ト事好何
後也事ハ御親使相成也中ハ正奥深ハ志
頼リノ事好ハ古今ハ物役ト取ヨる毎事ト事
好ハ中ハハ新井氏ニ事好ハハ 御代替ハ後
一人ハ刑罰ハ成ハ後也事ハ改ト事

此事申ハ由を慮ルハ後ト事好ハハ
私ハ保心カト事 御代替ハハ日本一
統ハ何ト事ト事 御代替ハハハ
御代替ハハハ保心カト事 御代替ハハ
不ハ而ハ皆結構ハ成金事 悉皆常憲院標
張對ハ由後ハ由中ハ由私ハ由去ニ事由御代替
成後ト事好ハ新井氏事好ハハ御代替ハハ
振ニ成ニ事ハハ御代替ハハ常憲院標

御選に成り而して後には成
御代に悪む
成り成り
御代に悪む
思ふに作
礼意の及ぬと
常憲院標御厚恩成
御代に悪む
思ふに作
礼意の及ぬと
常憲院標御厚恩成

思ふに作
礼意の及ぬと
常憲院標御厚恩成
御代に悪む
思ふに作
礼意の及ぬと
常憲院標御厚恩成
御代に悪む
思ふに作
礼意の及ぬと
常憲院標御厚恩成

世上る義濃も夏分かく中沙法と申すは
御笑は振ゆる由なり

一
私中の法代書に御書程神曲地^りなるとも大
分布流仕は振ゆる候少と申制禁も之と夏
見もそまを威分中申すも只法構不成
にづくは之を中老中余りまを候少
けは法に振ゆる人々も動中端もて法
成と申すは御書程振ゆるまをたはとも
御前は左振ゆる不致 思ふは是に候は候

思ふは世方急な夏と申す有振難中管は通誰
ともなり 御書も出ゆるは之を急は候
急に付下情お違は申すは振ゆる夏法取
要事申すは法成は申す付成事と
ては之を法に振ゆるは法に於けるは法に有
事は之を急と申すは之を急と申すは之を急と申すは
候もては之を急と申すは之を急と申すは
法後この候ゆる上て申すは法に申すは
一 又法中の常憲院振ゆるは法に申すは

弘成 御隠居不仕立て弘成振もせしむに付
砂振と申候おりのゆる是を以 御隠居不仕立
弘成は入用弘成法りのゆるに内薨御
手紙 御進弘成子付令振拂底仕立左
老申弘成上ゆる令を懸お成ゆる多ふ致
はを申有と振仕度旨申上ゆる令にともよくて
弘成公懸お弘成るお方弘 作出の意る
常憲院様の御時令振吹か弘 作出の令
振多弘成の左大地震る 御城中大分破損也

は候理弘成申明日もふと地震大災未有
間お拘るも申くゆるおか令出来は振
用意不仕をゆるに申ゆるいりお氣を成
事出来も延斗はより弘成上ゆる 御
弘成祝は振し不造らるゆるを思はは
上 御自分の 思百をも先弘成作はるは候
て弘成は各令振吹くも 弘成代に弘 作出
をゆる地震ホし時分を度にお海申方申
就とも令振吹く等し候をゆる地震ホし

天災有るるを以て 御前ハ 思ふはた極し
後不仕何とも將軍宣下等いうやうにも相
違ありしはたつきて御前等 思ふはたと不
思ふ事又地震火災あり大變お來仕ゆ
その時天下の如きは御一身はつふきては
与由覚悟を極し御意は誰と承候新舊
私中の忘事には人け 上意を聞私中は
御事、張望ゆる天下の難儀と由救を極し事
とかく不承の如しとてなきに私中もさき
と

感激むせひ中身は極し事と承ゆる私も落
涙おまひ中

一 又承ひハ 御代始右之通り勝自は不自中
諸旗本困窮子を救はて極し事 御前極
一夜七百餘人 百出の古分一夜は是れ祝
百出の事にてありしはは十七以上は
中身はは十に成志と前髪をおろし人出
中は是れおろして上と候と極成事とて
在中ありし不機短はれ 御前極し事の外

御機嫌よりお聞き多し是も結構成はれ子と
好しく孫の寛仁に君より私にも極く
御愛徳に成と承りて何角理くるべき先と
お申振下し不調法成候はれは物徳承れは
奉祝の極現様由再来と奉好はし御仁徳
御家御長久と目お成候に奉好はし申入

以上二條 辛卯
五月十三日書

一 先皇^御夕新井氏に系譜中の依後五所は淺野氏
早七人義士に許か子書に……金物書

張中の新井氏に傳り替りたる候と好はる候
せし中申候は只今申使に中申を件する由
至成奥源左衛門及ふと云をて中申の
りの吳んて有と云ふ不好は依後氏學術
是小くお……中申の依後氏も
か子書と云はれ……依後氏君の體云と云ふ
の……中申は語と好はれ……中申の大罪人と
中申は依後氏に上仙是ちよる子書切服
不仕は候名をと死録と貪り中不為……の

中やうふと曰十七人泉下なる水ひつゝ一糸を
發して中はぬは是是非評判は産ゆを極く
学者といふ方く不存は加列はもせしるる中
一色はる見えしるる念中及び好は以後し
念
此も不存成は

い二條 辛卯九月十七日お江戸錫小谷勉書依後氏評を割

一 當上極沖成徳の事 物野探出の竟幸より
以來代々の聖人の書たる極彩卷の六枚屏風
を舜かといふ鳳凰の來儀と書たりのめ飛見事

成物あると先年古物と成んつと 上説入
このむぎくくしては指し示す成十七日沖忌日
麻上下巨たら時始る 上説ありく 上言えん見
事成給か事とも聖人の像と懸物標して
床に懸おとするは昔屏風と云物に延席の上
立をく平生對取付くも見ら物あるは屏
風杯に雪燭乃像と書て見ら事勿辨なき
事と云はゆるは返く成はる 上言えたりなき
雪燭の像初にも上下古すくは對

不_レ成_レは_レ極_レ聖_レ人の貴_キ事_ト云_フせ_レを_レ
一_レ事_ハは_レ方_ハ侍_薄の力_有き_に一_レと_ある_を
林_道去_リ 家_康公_の事_ト云_フを_レと_云ふ_を
孔子_ハか_レの_事ハ_知れ_るも_天竺_ノ事_ト知_ル
矣_狀述_ハ天_竺の_事ハ_知れ_るも_康乃_事ハ_知
知_レし_レ我_レ 家_康公_ハか_レ天_竺の_事ハ_知れ_る
志_ハと_云ふ_を孔子_ハ親_迦乃_おら_ふ不_レあ_ると
と_書く_を極_レして_まん_と云_フ儒_者世_ニ用_ル
る_をた_レ一_レ人_ニお_られ_る位_ハ不_レあ_るて_聖人_を

と_云ふ_を下_ニお_らふ_を一_レは_{孔子}聖_レ人の_之業_ト
を_信じ_用る_事ハ_大切_成不_レあ_る

一
今_秋正_徳二_年日_國中_玉色_大水_の極_子流_を
有_レ新_井氏_清守_之故_在有_レ事_ト云_フ
増_水ハ_成事_トも_ハ天_竺と_云ふ_を御_孫成_レ
ハ_極子_ハ由_舟ハ_上免_角上_小合_せル_者
御_孫ハ_方事_ト云_フハ_一事_ト何_レの_後接_有る_を
事_ト云_フハ_好山_御中_年ハ_及以_追甲_府
平_成清_府倭_領の_仕形_トも_差る_能 御_孫知

弘治 御徳正成山友と云中は御即位おそく
沙洛世の留末經今少早 御徳流不立成夏
孩念山成也 御年若くして 御即位ゆゑ
た根は此氣分も有する補うに結句遅も
幸となす好也

一世道いふ少くは根をこし根子のゆ 當今漢宣
帝比一中元をこし中元意もた根を好ゆ中
真くまとして稱は慢く丙魏の長をこし國宣王
漢宣^帝唐宣宗行事も中真くまを當今

一 御名宣の字は身成ゆ事 身事と中事ゆ
九月廿日改心徳二年當る御不豫正成法府城
八日及十月朔日おはし御出度不立也御療治之
初真心交竹院を後園道芝敷爾通玄徳海院
に依るおきし成は御使給之し少付教月又交竹院
御業張 百上御藥一貼より多し不立正加ゆ九月
夜急に御指す正成也中御志中候し也
城大久保加かき後より忘申し成也 御免正成
張張おはし御肝積た乃方より強指成ゆる人多し

類少も弘 石上公以て殊く外御苦痛なれば
獨多湯上下後經成醫師中と東に居り
翌十日是に殊く外御煩悶成ゆを少く御く
ゆるき成成まの御疲を急救 御疲成り
是御粥と曰指目條あり度と弘 石上公成
御静子此を承り十一日時分を少敷と
御本復と承祝ひを終り十四日曉天薨御成
ゆ近代に
質明く君もく殊當年の
後御仁改り行り事一戸祈ひをばは合子孫

天下く不幸の十四日熱病は出ゆ
由乞申出か今曉 御他界へ候御作波を
御書に書あり方と林七之郎高讀上り
名流御子と流馳仕別紙あり
言簡而義深共下り御統統以來三年
日敷天下に事と 御昔昔成御跡
御子弘 御書に事冠に御成存好
送候に 御書に云る増上寺に御紙
以後に弘 御書に事冠に御成存好

河當家と河代と淨土宗と管する殿子 権現標
台徳院標増上寺と河元並新権現標 八幡院標
初る台宗子河成新権現標 河代上野寺と
河取並下は度又上野寺河越不立成ゆると
元早増上寺の河由徳絶中より水舟ゆるは
度々 権現標 台徳院標より増上寺河越
て新成との河造と云々より令根と事と秋元
但馬守度と委細と 河元寺と大畧承ゆると
令根と事拂底所ゆる河代と新成と

思百ゆる 河先代と河者新 河代と河共と
新成と、新成と河元及 河元と河 河若
河元 思百色と河元、 河思と河元と河元と
河改新成と河元 河見合新成と河元及
河不寺と河元の新成と河元と河元と 河跡に
河新成と河元令根と 権現標 台徳院標
河代と河元と河元と河元と河元と河元と
其後と河元と河元と

一 九月廿二日 河指詰りと河元と河元と

沖正氣付の故を柏子為新の故とて沖次と柏子
此書より十日を述。沖息絶不中内
い方羽紗一巾故より一何の根元 沖作逸
成 沖聞丈三 沖出不紗坊の巾を述
閉の義を述透の成 沖教免の是も成
沖ゆきけ志を平意 沖免を成と成 思百は成
沖免不成成ゆり一生強後よて好らるる成ゆり
ゆりとの義を述成石 沖造の成書成其時かお成
ゆり成九日の沖目付ゆり元りの後事一述と

之を成よの成 沖並不残坊ゆり巾を述成
元何義久の沖別深成成ゆり成其成ゆり成
て成成ゆり一人と 沖兼成成成根と 上意
成名を成成ゆり 沖目見よ成成ゆり成
成成に 沖成禁と成成ゆり成成成成
よ成成成成ゆり 成成成成成成成成成成
沖目と成成ゆり成成成成成成成成成成
沖成成成成成成成成成成成成成成成
沖成成成成成成成成成成成成成成成

おしよの早 沖絶成方の由 作の定て
殊外 沖若痛成とも不叶候に在り早
沖絶成方思召る候に 沖痛成を好む
去共そのもの少宛沖への候も成候に在り
相談もくはる人參もく迄に却る候外
沖絶成候に候も能好む候と事 何とも
能美子可い候ははる人參と上り
ゆく沖絶成候に候も候に候に候に
残念に好む候も候に候に候に候に

張 巨の根より上り候に候に候に候に
持する候に候に候に候に候に候に
去とも只今速人參沖お癒不候成候に候に
巨の根より候に候に候に候に候に
命と不候も候に候に候に候に候に
候に候に候に候に候に候に候に
御絶命候に候に候に候に候に候に
候に候に候に候に候に候に候に
沖絶成候に候に候に候に候に候に
候に候に候に候に候に候に候に

勤中羨と云々只何候して私を以て
御絶命進ハ何哉得る居不中候も御
以る 御傍に居りて於るに御
私 御成社安靜に 御傍に
此 御英明と羨中候も御
を好む 東照宮に 御神靈も
御成社に 御傍に 御成社に
馬に情只翺君に御成社に
御成社に 御傍に 御成社に

御遺書

透る御人不知候共此御成社に御成社に
御成社に 御傍に 御成社に
御成社に 御傍に 御成社に
御成社に 御傍に 御成社に
御成社に 御傍に 御成社に

十月十八日
壬辰

不肖の身

東照宮に神統と承りて天下
乃政事常に 神徳に翺人事を以て
と此我らに在世の日短くして其志乃遂

たふ事一今及てふしき所を知りて夫古もの
主幼く國危き代にせらるりて世乃人権を
争ひ黨を多てそんお和のすしてお疑ぬ
よあうけるか一胡賊乃人と舟を回して
あを渡りり其かを二つしてそかど其よ
すは時ち風波の強とも渡る一況や今此
世の人商家創業の後治平百年乃るり
相争ふお長ふる事一誰の 東照宮乃
神恩よあうけるものあるをいへん

神恩より報ひするもの世乃人もの免を
好せ古の幼く國危き代にの事一其を
以て諒を戒とせし一其志がらん
におあてし當家乃危難といふことあるは
む是天下人民此不幸なる一凡天下此
を海大小よりくおん渡るを事一
思百志也

正徳二年十月九日 沖黒平
張 作出之類

上古以來我皇もく令銀を生ずる事其
數すべからず天下に財用と爲るべし
事とも世の人の傳承する所なるに
東照宮沖治世の始長十七年、及
天運の時皇の友を神徳の威し
天下に家心一時に開き始めて令銀を生
ずる事我國の始なり以來いまだ
ゆつた是よりして公私を徳の財用
かに事足らぬのころにおもひ我皇の外も

令銀を求むる爲と爲るは後來の事
く又我皇は資用とゆふかに事足らぬ
日よ玉の皆是 東照宮の神息
ト爲るす寛永年中我國に渡來
る事を禁せしむる多しと
今日も玉の多しに渡來るべし
かゝるを以て我皇は令銀の
務りし世の人又推知し
に又長の事或る異國の中

流事入或は火災乃為子焼くせ或は神社
佛圖衣類悉數の為り其費一用が
不凡九十餘年の爲我皇の令銀大造を
減しゆあり六下此材用お通し一筆
其始子及び終一是よりあるごとく元祿年
中令銀の法を改め造らば我皇通用の
令銀又その數を俵しゆ形事とせしむる
年通銀の事

東照文代定むる事一京より六下及

もはひよりありて工高し類ありて大造出
しゆ令銀の價を納し其利減る事
魚うりて海事を謀り物價を増し加
く高賣しゆ及て徳物し價は年々に
多く令銀の價も多しに納く成りて
終よ公私の錢の難儀はもとぬ異朝
ありて古よりとて室紙貨乃亦言下同し
其數事其多就中中古以來其寶鈔を
紙を以て令銀の如く天下に通用せり

の事今よむる代々一同の元禄以来
の令銀たといふ事とすも異
の室秘ふきくも屋うも此
家國の守氏者そ家業を相傳へ其
用成お海一の事

東照宮より以來代々此恩よるも
好ゆしよそ令銀乃價も此の
ます法物乃價もあみかす
今日此銀はも及よむるも此

利を争ひし事多し
あるに答じるも只
偏に其弊公私を後の故と成ゆ事今
是是非を論じ及よむるも都
是等事とも年久あはれ事
よはれ 伊代乃始よりあり 伊代
惣は令銀の事本代とくに法物價
平かよひて天下此類を除く事
伊代意はる凡も物一多し屋事此後

今の如くはかへ返して送る事ハ定まり
あつてもせよしく中にも今日金銀は果と
平らなるとなり返す事ハ事ハ必送る
事ハ若し能くもいふ事ハあつて今日金
銀と送るもその如くかへ返さるゝ
天下は通利一果は金銀ハ俄に其数ハ
半を減し天下は人若その家付は半を
失ひ又工高の類ハ利を課すは今ハ
かくこゝろは物の價も其半を減して

高賣りの事ハも是れは今日ハ金
銀の數も今送は半を減し諸物ハ價
半くは事ハ送るとさうかくは之ハ公私
貴賤乃送るは甚しき事ハ是れハ其の
是れ等ハ後よりありて卒尔ハ津沙法も
及ひ送るは内新金ハ事ハ或は火はあつ
はるも流りせ或は物も事ハゆるも
お換も室
を失ひは事ハ是れ由 問百及は事ハ
事ハ送るは先を果とさうは如くに

改め造るる事由云 作かゆを形乃少くは事
と不て然ゆゆも 金銀の法もとれおとく
か一返さるる近は天下へ通用しは金の
敷をまを減まきまを以て不て然事
はるしは友りしはひさし然るふまへ新銀の
造れにまをりしはひさし去乃冬にむる
て銀まへて通用乃國にまを造れ絶ま
及之申 聞言も對よ不て然事 思百
まはるまへて新銀を造りしはひさし倍
す

せし事ゆは上と 從更よ金銀乃果本の如
まか一返さるる事 日に 沖を
つてさし但天下に家も天下と共り
家とす魚も物にゆゆ 思百小まのせ
く沖変定く能事沖事ゆもひ今日
金銀の果を元れめくあ一返さるる敷
乃まを減しはひさし長以て代
るる事ゆは天下の材用程ゆゆある
魚も事ゆは倍しはひさし 然る上

天下此を辨ね共々好むを我は此金銀
万國より務まるる可代の後追乃定むす
處を物とせぬたとい各其賤を此と
夫ひ此を具品と元の如く一か一返
とふこと事には存一高此物もおま
好むを金銀乃果もよあつくこか返さ
まひつたとひを利を考知とも其物
此價もともを減ゆる高賣に仕事に
此好むる年来り 抑中意ふゆるす

屋の金銀の品を元の如く一返さる大
下此類を除きし一若天下此を辨ね
今日通用の金銀を數り半を減せし事
不て此は事と好高乃數もその利の半を夫ひ
此は事と好む一の如く存る一おのく
天下此と共一具品を 抑中意ふゆる
只の事乃道にも金銀の如く一各國可代
の如く 東照宮定むれ一法乃如く
なり返さる一 抑中意ふゆる天下此を辨

よ詔くは方とて好しうと云

作書也

辰十月十日

一 十月廿日申刻 御出棺より初る天氣晴

く終日長雨は御座候供奉敬云衛く元おく

御之滞増上寺に為 入山次善人愁涙

て御残多身好神に御座候 御出棺前

日より 御出棺より近殿中夥多金銀乃

在御座候と云ふ事あり其後消すは爰揚り

文の取ら小珠はありと申小珠只今御見

在り候は奇瑞候し不承後御座候佛者候御

く流を舍利御座候由申或は雨珠在申候

ては是は御座候法人の好い免角難有

御座候と云好い九日候あり十日は追御病

氣危急に御座候御座候御座候御座候

其候急に御座候御座候御座候御座候

御座候に御座候御座候御座候御座候

と末に候 東照宮御座候御座候御座候

御座候十日は追御座候御座候御座候

絶山と 沖待張地より一日に新井氏地
なるは十二日ほど多く新井氏 沖前張
石古より一府山を極し 沖待張古今 人集
終小不承後一府山を根地花地中にも出ると
とを好む
十月廿二日書 十辰

一 九日秋張及 沖危急なる秋中沖を中の方候
乞 城一府山羽三十日 沖之家は乞城
沖對面は地 沖志 儲君は重義沖傳懸
此等 沖後見は後沖張云 思百山候云

御家山を尾張中納之度沖待張より外山を成
義とおゆひの山候と且山沙法義は五府山
由一人を括別は後山の中を由待張と義を人
長らるるの忠義と好知はと山候とよ此山
祿之候は府山之家は義と多根の時義は為
了 権現様沖ありて並に地は山 作並
山色及不中義は府山之家合祿仕はる法事
中合 錫松様は 沖を云て仕は私身の上と懸
為義は府山は乞城山の中水戸及紀伊候

と記す合急度一記中少は表又紀伊後杯
前記の得後色はく各戸履有と中合急方
二戸入の兎角天下此御為より一と根二戸
以る御の安之記 思ふより一御請之以後
を中列履之方と直覺之を成らるは上之者
記大事事は好む者と中も皆商家御護代
乃而くよし中も忠義と好む中も後之者
亦と助之及不中後おろくそと善しは能も
法事ら成肝要好むと今 御前より長け

中入の急度記中 乃而くよし中も忠義と好む中も後之者
亦と助之及不中後おろくそと善しは能も
法事ら成肝要好むと今 御前より長け

一 御細之様は 御傳記成は後後とくく 御恩業

有るころ後此府は九月廿二日時分は後
くは之時分は御不例轉て之と根より
大方平けし毎に法成法府は記昔 御自身
より一御御氣也如根少也記 思ふは
去るも又御不復記根は多記してありしと記

思百山を時分筑州と 御藤元は張 石考は山張
作は御氣分は御醫師中と扱は御
之極小を不山 御自らも丸極小を張 思百山
得た何とやらは御氣分は不張有は人の
病氣と中との射斗りのは御氣分とこと
仕る交もてあるは 御跡は御氣分方
皆御氣分は御氣分は御氣分一人と御氣分
は御氣分は御氣分は御氣分は御氣分
其才事と学者は御氣分は御氣分は御氣分

張は山張料皆御氣分張成は御氣分御氣分は
張 思百山は御氣分は御氣分は御氣分は
鴉松椽は御氣分張成は御氣分は御氣分は
山張は御氣分は御氣分は御氣分は御氣分は
為尾張屋は御氣分張成は御氣分は御氣分は
御氣分御氣分は御氣分は御氣分は御氣分は
御氣分は御氣分は御氣分は御氣分は御氣分は
御氣分は御氣分は御氣分は御氣分は御氣分は
御氣分は御氣分は御氣分は御氣分は御氣分は
御氣分は御氣分は御氣分は御氣分は御氣分は

代も大切なり 思ふはた極色くは御料者
諸極はともはる御をくは好むは
何し御氣をもそは後には好むは
こ子懐乃子に取も誕生し因妻妻期
と中事ひる平生百未衣を位しす
はる後天下を治め申況やもは
御成事抱は 御正統く君もく上は
御傳と申りて天下此人却る何
お甲府のつこ糸の面くも合
合点仕るお

御他界の目もやぬの申すして尾
當分御渡おとくは後ひる
お法吐乳を成ゆるも其度毎よ
つこひるおお来は種しは成ゆる
危礼の端とも好むは後にも
御をて天下守事をも御之
よのはお誤ゆるお申し
お申し申す一こむは思ふ
衆は後ひる水のとれ泡の
お申し申す

御危急の間一事も 御自身に私事には
不注及遠々天下人民に及るに御政事
後よりまよもの正寝よく執待 御終命は婦
人と終りし御近付不執十三日東 御絶
息を執り事古今人自に終りて極に故未
為承後と有感也

一 尚上極成に御機極克御生賢 御史史
方より望為見ゆりし御目も成程能は所
かしに事ある 御目急為極に中は極ま

尚分し候る 御平念執比以自に承し
とかく 御位は沙海にも如所府と相見、極
別成と皆く有感は毎日在中 御目見
るに執候也 御上候に上に御禱を御
御傍に御腰物をもちし御上候に際迄
御もるに危 御事と引く死候は故をま
御禱へ 御上り執候は沙のとはは沙刀然り
然りし御服刺をい御側は指並に故を
御自身に御九御たに候に候に御極に候る

去人々し由を中^に 沖邊へ出た透と

沖目見海より瘡を記す中時からちいし

沖邊の破子あり又古海に破きを人々し^に 沖側

の所は破子あり乃極海への所は河原

浜より頂戴退か^しより^に 沖邊の舞臺と

新地沖出する急ちくと沖邊の石の間

部及新築の地と^しなり^と 沖邊の中

沖邊の極はなる沖能新地との段を

沖か^し云に記 沖邊の河原の地

時と熱^し、第おさ^しれは神は

一 江戸中今以愁持身^し根子の所分静證^に

は瘡の以^りも急^しなる^しもの^には^しは^し

急^しなる^しもの^には^しは^し

好^しなる^しもの^には^しは^し

不好^しなる^しもの^には^しは^し

事^は好^しなる^しもの^には^しは^し

事^は好^しなる^しもの^には^しは^し

事^は好^しなる^しもの^には^しは^し

大方境地も完つたは種に中比道灌塚の
小石川御殿を造らんとすべくと新井氏
中比御宗廟御建立し御志もよくし
是を御宗廟に託し仰付給ふ天子に七廟
諸侯に五廟に割り御志よくし又廟
に託せしに 東照宮に御廟を
百歳不遷の廟に託せ給ふの儀に
若左様な儀もして候にお來りて天下此人
耳目と改め儒教盛んて候となす好む

おしき候となす好む

一 唯今く御様子御瑞意を申す間御誠意も
御多中務を捕ら御政とお見ゆ井御掃部
後より一おもてお見ゆ御之儀となす
御よび人託すに御の御中も早急
も御部屋の料等し御は御中御由
先上御御志も御前も事御
御志を託すに御は御入と御志御
御志も御事御後て御

作並ひありて同致及ハ筑後日何事しお
後ハ仕方也 作並ひ也ハ只執事ハ好しき縁
し一事進付もの如く一家の事好しき日や
胃部及ハ毒物差紙ハ人々ハ定る残りハ
茂也一トハ好し強ハ一病ハ不好ハ胃部及ハ
返一皆ハ協を沖合全ハ好ハ一好ハ一好ハ
之兼事ハ服ハ何取ハ一更ハ一更ハ一更ハ
比開合ハ及不ハ一好ハ一好ハ一好ハ
内ハ一上ハ一好ハ一好ハ一好ハ一好ハ

とハ收ルルもの料 爲りて以日ハ 沖他界早
如ハハ香ハ好風俗ハ結成ハ大久保加別ハ後及
末子ハ一好ハ一好ハ一好ハ一好ハ一好ハ
ハ事ハ好ハ一好ハ一好ハ一好ハ一好ハ
夫ハ一好ハ一好ハ一好ハ一好ハ一好ハ
投氣ハ一好ハ一好ハ一好ハ一好ハ一好ハ
秘苑ハ一好ハ一好ハ一好ハ一好ハ一好ハ
近衛ハ一好ハ一好ハ一好ハ一好ハ一好ハ
向ハ一好ハ一好ハ一好ハ一好ハ一好ハ
左圖ハ一好ハ一好ハ一好ハ一好ハ一好ハ
沖内ハ一好ハ一好ハ一好ハ一好ハ一好ハ

もろ敷の海軍に馳走仕はると好むを卒ふの軍
後にもおろしやうと俄にこゝろに身入久保の
間敷屋の四守正覚と成其言仲極を先達
那もや十太衛の至護院及身入し所を先達に
張越の町人の山伏の志似仕事一騎の取為に
しとく急度罪科の言中付の況町人の民志の
志似仕事一玉極法介の候はの好友事以
日妙法取の表を毎にしとく不一就美の法料者
こゝろ候は好むを正言中入る不可に龍州の

内不の爲にせし中と龍州の言中しとく其候
委細達 沖種は成程大久保の官部との
爲し下におろし先下にお極く候は候人
おとほしとく急度事 作付しとく中
其事は平生天下の政事并りて沖種は成
候は表又料等とくしとく候は成り 沖種
平候はしとくおろし中と 作付し大久保
言中しとく未達候に事好む私成程後及富高
子枝持をしとく何と候しとく先年富士

焼の時分小田原代砂河程乃けゆるも城取不中人
力大分入中は是とのけ不中ゆるも城取も立不
中ゆるもに大地震る城郭及大破修理は仕振
もきし部し難後仕はまけし志日既意以下
仕はあは度く城ゆる合も子文えて仕有るもてふ
合も子文えてくれゆるもまゆる小田原城に立中ゆる
息を吹るもかゆるも報し一戸振せしゆる人
あのみ礼に扶持有せし一と中ゆるも新け進ゆる
由扶持不中ゆるも徳由神在ゆるも未代せしゆる

中ゆるも一と中ゆるも中ゆるも一と中ゆるも
同中 其方より徳有る中ゆるもせしゆるも
ゆ氏士れき似仕ゆ城を思る不存後ゆ是今好し
未のせのしゆ中ゆるもそのゆゆ中ゆるも
けは同役中の一仕お候と不中ゆるも扶持せし
ゆるも不意ともゆ中ゆるも男進取御しゆるも急度志
かせ扶持せしゆ中ゆるもゆ中ゆるもぬ紀伊参度方志
能後ゆのゆ中造ゆ不ゆ中造参方ゆ急度中造ゆ
ゆ何ゆ仕ゆるゆ後友せしゆるも馬馳参信徳

少下上音 上三意し由下未の紀伊も後区は其の
能かしくい大久保か加えもる扶持もある或士よ強
成りも取り在馬鏡遺下との城は先是しもう
不日よも志あり 加えもるも下未の城は其の
右し仕形を仕るゐのい條りと治河詮義に及下る發
する事海下は何も透しと上と達ゆる候に都中
方と畏伏仕下神の者そそ女のため成程ゆもた
志のいもうく河変断そし振よんく河思あ未変し
下とすすゐのい下しは後まこし 君るは府の

就の極成 河生質の由下中の私乃不見け君も
絶出さるはげんも絶おし老るはあ言絶まし計りら
まは城を古今よ條りまこしるあとなりて代に指
さるは秦漢以好齊の桓公の於管仲燕の思も
於樂毅漢の思烈の於法魯亮秦の望も於王
猛唐の志宗の於魏微古今も君臣知遇と下り
新井氏の材樂毅王猛と比せし下し絶もも子
術し下しきま下し樂毅等の乃ふもにあは
ゆるも詩人もうく詩文の材を好む下り道学

し志するも一なるかの極よ好むを又思ふ友極もくち
すこしの對州の雨森なる所と對か杯あけ人を
色 上に御立世よさうの切も選挙し答は申強意
いぬとよ中の梁田才奪の事よ中の役よち中
ものなるさしや一よ中の友詩の枝群しよよの
おき後とよ中の友を李白と詩を伴つと韓退
之布と文書ゆる義思ふ返る事よよのけい極し
志入る中の天下の學風を也變一とよと程子
よと求めよとよのあすしとよと一とよと一と事

返すも強多ゆき 嘆息もくはかしの友を
自分たれ牙の指の友を充まふ事一とよとよ
御徴存も詩文の事一附するもく一畢きえん
不るもく一城と好の梁田とすく一雨森とこれ
中のよとよ知中のた恨もく一自印假不書し書
とよ中の返よよ玉公せ我會已從人し志いこう
よとよと好の貴傳賢者よよのよの人物と
や好の既也 百おの答よよと成 御三意はと
對馬書小書もく一只今朝鮮來聘し何分あり

人の内事一と者とけり、取ゆるを、時外難城て仕
る今一兩年お待一平 石おゆる 上言る延門
し内今為お来人し、幸不孝せけし、中影井氏に
中山私中山とた山崎を、拙史抄も先孝と中山と
去た一分し、結合と中山と、只今道と別よ、若中
候も、一 沖志に、おぬ、故事、おぬ、一、好城
よ、くも、せ、く、山、崎、也、 上、く、沖、に、政、院、の、感、一
在、成、夫、と、間、を、く、見、せ、仕、ゆ、く、百、分、一、と、其、言、れ
沖、用、後、勤、山、崎、も、是、く、大、奇、と、も、一、中、山、を、け、た、

一 山事、く、何、も、か、も、不、足、論、の、只、百、或、拾、里、外、に
死、を、予、お、野、し、人、と、及、沖、聞、遠、く、 沖、徹、存、に、
山、事、是、を、お、應、よ、知、己、く、 一、と、と、中、山、は、候、を、
一、生、難、忘、を、好、い、ち、く、
一 山事、状、又、取、取、之、人、柳、は、見、ゆ、り、お、本、大、中、に、成、
一、と、中、山、を、お、く、元、也、と、子、友、中、あ、の、た、山、を、
用、な、す、好、い、^也、方、第、紙、よ、く、取、候、中、や、事、
不、信、し、取、り、色、山、と、も、山、之、人、取、候、を、面、候、よ、
か、取、候、子、連、取、候、下、候、に、山、崎、を、取、止、候、と、

Pをい

一 小笠原佐渡も後事新井氏降く印巻云はP
はあは人事急る加州かともくも御免申事
人へ振ふ承り友 御治世は候へ御罷任は
を好まぬ存へ外御籠り申むは方より然し申
たのめ下る沙汰仕事 御上の御意は叶不申
男と御中とお見下と申は是を如何に故に
尋ね候き目も左様くすまは 先上様も御
外おしく世 思召る候へ也 御意もくは御

け人あ丸の半成は御山にこそ実しく流致御事
その時を色く浮説も又く浮説のこもあ
之の許候もかゝるいふはけ人様は柳坂方
かもおし一ト故おと不承候 御代は五成り
付佐渡も後事新井上は後遠る由新らむはけ人朝夕
我義を不念人よくは候下く西眼たよ御許
たす候と見、不承の今もくも又つたに足し御
は後事 御代は天下群居くよは不承の
あ眼とく不承りるす、一の世も又くは御

あひらずおん事下極よ成るるも天下共批判
とまゝに 上り御為も不て御の事とまゝとまゝと
御しる事と不しる事と不之悟者と不之
事とまゝに 上り御身は氣も心とまゝに成る
事とまゝに今暫け分るとも成る事とまゝに
事とまゝに天下も御身よ入る事とまゝに氣も
好後事しる事とまゝに御身よ入る事とまゝに
御身成程下本を 思ひしる後事 御身成
事 御身成程下本を 思ひしる後事 御身成

花を 沖通は御身成程下本を 思ひしる後事
御身成程下本を 思ひしる後事 御身成
何とも法神名も付さずしる事とまゝに
事とまゝに御身成程下本を 思ひしる後事
入道と名乗る事とまゝに御身成程下本を
事とまゝに御身成程下本を 思ひしる後事
沖通は御身成程下本を 思ひしる後事
御身成程下本を 思ひしる後事 御身成
事とまゝに御身成程下本を 思ひしる後事
御身成程下本を 思ひしる後事 御身成

中色姓名忘れ申せし人とは区差を執る事
た下は其区差を執る事作中の区差を執る事
思ふに通交を執る事作中の区差を執る事
はる役人へ申す事他人を比し申す事
由亮中の何事平儀又其儀申す事
由亮を佐渡申す事申す事
正秋元但馬守後中入る但馬守後より右に執る
作下より申す事申す事申す事
只も人御次平伏して執る事申す事申す事

新井氏物語なる法解を借法なる由も上は志
はばはる事の外も申す事申す事
新井氏も其日増とて供奉とてい

一
御遺書を先日申す由新井氏より成り
漢の文書に申す一見申す由と申す二通に調遣
申す由又先達る評定所申す由成り書付
全報申す事申す 作中の書付定る由成り
申す由評定所申す由成り書付別る事

成美とす感語寛くして意をこめておぼゆるはた
し 抑世書を言簡而義深とておぼゆるはた
新井氏第百二とておぼゆるはた 上に抑世
再之抑世集に成 思百とて 抑世とておぼゆるはた
根よ急る取るとして又書きたる新井氏又書きたるはた
頌向を皆 上とて思百とては自に足部及に成
覽其姓名を不承は書きたる 抑世書新井築後
書きたる宛りて抑世書は築後の外に成
本朝中とのそよの候合少くそよ又はたのそよ

ゆる後又書きたる抑世とて少く目のあきりては
築後書又書きたる好する皆は成を其後には成
し本に成る共右 抑世書をとりて 抑世書
本に成る 思百とて築後書は成 抑世の書とて
再之 抑世の抑世書は成るおぼゆるはた
し成る其外に成 抑世の抑世書は成る
又書きたる新井調ゆるも其の頌向を不承 上と
思百とては成る 築後書調ゆるも其の頌向を不承
と成るし本に成るは成 上と成 抑世の成

と我調中の人よ山嶽後書よりいふ事
に前法合とて戸山左様と交授くおらず
このいふ 上も左様と云ふ 作本はと云ふ
が 一は成区と云ふ好也

一 評定下し書付よく仕也下後諸事一は功
業ゆるよやく以集坊の戸山左様其理と云ふ
不中ゆる子仕也いりて不て我後と云 思ふは左様
作本は結構也 作本は迷惑成等痛入中答よ
ゆる一系左様よと云ふ其事一は仕也

ハツ付かよの善道と只評定下と云く諸ら左
様中いりよ 上も善道も愈ゆる事と
吟味委細と云 思ふは左様のいふ口好と云
こ只諸ら左様ゆる是と撰後書及しは恩を善
まてはも左様と云ふは申沙汰と限と存也
其中よ又神を成也 作本はあま迷惑はと云
も好也と云ふ由也

一 加茂殿中なる事 善道是すくましく利益成
人其上一 御前代も久く善道事なる諸事一也

仰る人にもせしむれば先に始終 上にあひ不
り終よ其方と世替氣して初礼の死去より
教く志そあむ事の子細もさしゆ 先上様
西飛の事 入の前日遊馬の沙汰もせし
御存知せし事より前日へ来入り甲府回部
越前中後上越中へ是一程と文庫へ入
このまゝ封り越前中へ披見しゆと西飛し
繪圖の事是も由候に候と申しゆと云はれ
てお成柄の事をも申す其日俄より西飛上

御入し候中來ゆか振の義疎く外不届よ事
この石より御すくこと候に越中へ申すは好
ゆら仕たる事ゆ候に 御方へ為よふも振よ
取れ大臣の神と失ひ且又怪唐成は形は西
よりくこと申公よりし振も事 思石ゆと申す
甲府家老兩人是も志実成義と申す候と候
見届中ゆ候 御治世以後孰後書中と申す
甲府家の事 石巻の者透り御有と不詳候ゆ
何れ御本家此候と其に候 石巻の事 結構

成思百と為将を感ひ去又左振る度母
俊之府の石兩人し者左杯を材にそしり
其実成忠といふ痛中しるは者共と 沖平家
を中杯に沖海のせら成ゆるに 石をいり充中を乳
を成不しく行状を嗜して中か根し
沖の當ては後を好ゆるに 中上の成とも
上言ふに成社をいふは右あるし者左沖平
張杯はあるし者左 常憲院杯沖平の
候に沖平をいふは甲府沖平成の候

常憲院杯沖平恩し者共の候にけ者左や
色すまの 沖平代に仕事と漢に 中平は
け方と獲て中平に 中平は成を志す
者ともいふ士恩と志すに 時世に属するに
其始終かゝるに不中 我に奉意するに
し者一向に毎補不中 作は左新井氏と
か乃義に 不及用にて 選中平の
か色福に 沖平は 沖平は
うに成をいふ候 沖平は成をいふ候

よく中華のことは是等の中華の事よく在る
の者も及不中故に我が爲に志解れ老と斗り
好むる由より中事古今代通患夫荒小人其
機をとり見るまよひ 先上様の根よりの志
そ、氣也ハそよひ 沛生質一節の由り
のちる後とす好む 以上十條十一月七日書 壬辰

一 文昭院祿御謚号文字つゞきいづくは念今息
不仕ゆを 沛徳俊相意し事一とす好む
定る詩魯頌 洋水の篇允文允武昭假烈祖と

中文字を切中とす好む日本代祿号を文字代頌
送と不辨ゆる経書の文字を切ゆる用中事
と好むを文字つゞきいづくは念等も漢人かと
と昭文皇帝かとては 歳有院祿をとも
有歳の管は正徳代年号不存代例唐日本
乃事跡お考朱川進仕林大守成沛を中
お系け号号宛の中時分よの好奇を在る由り
沛兼代も加勢は後法お誤後ましく不上の申渡
述しむる由り中方も左様と事一不棄也といふ

何後は論議をむね極むる後ありし大極し
古今不吉の例に論をも早き國家永代神初も
ゆる系類に沙断中と相改め極てはかともP後には
新井氏如何と論ずるは方あるしを又魏州一
身合点不系後には是後古今の例事跡をとし
相考すむありし不詮是を古今の例不吉を純
極よ考すは指多のよをくすしつて年号を以
名するは月積く後に在るは年号を同
事するは代字不吉は成りて一年乃初月と

正月とすはる別る祝しPは一年乃初月と正
月とすは事一不吉は苗のとP後には十二月
昔は名懸月とすPは代字はよく相考なる後
ありしPは事林象形を後図とPは何處
金後し及びPは代字を止すると書P
は不吉と事南水朝の覽人乃名代事
ありしは是Pは夫の大學既にPは出さ
事しるは有しは神代智を以て極し事
考出はく翰林の文柄と再び極り度との後

人の朝笑

一 新井氏はPを先年甲府より初く侍儀

に對し何なる後Pの二張成し有就云 仲直

Pといふ處なき 仲直はPの成りて始終

經書より義理ともて成成 仲直との縁なき

は後Pの成りて成りて後Pの上の成り

目る一旦は後よりくそくは始終 仲直の成り

思ふし申す 仲直はたはつ先詩經を讀み

PなるPと初儀は詩と讀みPの讀むる

仲直は成りて新井Pといふ二代の時より風化

成りて右上の風下に移りて後世の上より後風

化なり右下は風成りて上に移りて只今江戸に

此風を見りては若き者も髪に結衣履

乃換振をきこと堀町の建亭を似せり此

風も悉く吾京の傾城の風を似せり此振の

下の緒より不正の風より浸淫はの成りて上

正しく成りて事一申して成義といふて不P

の成り 文を此化園門より成りて及ひゆく

江漢の寫進化—Pとの義あり重徳代感る
ふ儀とす好ひ只今風俗を正しく仕ゆ
先嬢風を柝P事—事—とす好ひも子
細を唯今塚所私能見物仕老た氣事一
事仕飛ははと見ゆるハ俗と知あうあき
男も涙とあひ—Pハ七喜を—ツハ友あし
る事—斗つと加振—感—P—く—い—る
あは淫礼の仕飛と見ゆて—定る—
Pとす好ひ是は—不正の後と志—付P振—

新—ゆ—た—何柝—正—き—事—とP—
符合意ゆも受不P苦ゆ是—付ゆる—
被樂代あゆむ玉極あら事—とす好ひ—
正—き—事—と新—舞—る—只—淫礼—事—
塚所—と—付振—人—ふ—志—は—ゆ—
風俗—も—改—む—る—不正—
多—母—こ—只—今—樂—の—
玉極成事—とP—
成ゆるを事—た—
上—
方—

有る官衆と存じかく是れ其當時の制也
よき所は制よきを倣て私に服て仕事と
不好の事と不復し私親も同事とて改て
自分よ彼とて之中事一あり非礼の令を
寺系請 卽位牌 諸礼体 一統の
斗目七袴とて 卽位牌も加格よはる私
家にて麻とて之中事 不坊成事とて
酒肉の事 夫只く諸大名其旗本元十日
と孝行 相見とて之中事 卽位牌も加格よはる

一 先次 國恤 初令母の天花墮てんかだの儀
其地氏長公の衣作紙は同意とて見立よ
ある人々を物類と用事 左傳伯有の事
見下は是等の子爵の情物とて之の事
弘云と衣服飲食居下とて之の事
物と精花と御用事ありと群臣御恩と不
擇對 御前は時とて之の儀と教ふは成り

自然と誠意に誠は形ありて衆は精華種
中より衆の平生は善いもの上に善く
御生質より成りて花著よ 御流事にて
不徳といふ不善人 毫髪を鄙る御氣
象より 善く至極清徹成 御氣質より
右の天下に物精合ひては方地氣教より
あはれ象象と現より 御古来より傳へ内杯
傳へよ異香薫より 花傳より事よりと
傳へるは物精は不利に成りて平生俗塵小

不接事物を放り仕る皮膚、玉極清徹に
あり其氣ありて 御時より善の田豊く不圖に
いふ去た毎方ある事よりと 善く其時良
不景天氣に感より 御不よりいふ如けは
必然と御後よりは 善く其感より 御不
新平傳より成りて道理より善なる徳
陽よりいふる善くいふるも 御雷光見
御不徳を陽氣の恒浮より不景感より
いふは不徳の愚見より加神より熱る天よりと

氣と云ふ地は在る形と云ふ中理なる地を
地蔵のるを珠の成中昔の地を祥瑞と云
は怪異とするは其の理なる其の地あり
方おては是事好む

一 新井氏に於て後を著し一建議事
出牙の果は後相の成を何とて
不平の氣味有るは其の平なる水は
く如く果に建し不入りも好む指
Pの成を成相候仕の成其の成を一人も

之は成Pを吹日清自身長海なる地
は清中陰と追付相候にPの成を日光
清急代又立伊勢奉幣使を清例に通
たるべきや一はる朝儀に何事なるは
此の成に成是志不好奇候と好む成り部
Pの成に二十日清急代追付清急代候
二成不形由朝儀なる水は是の成に成
清急代は國表に成清後二年に國表
神社等清急代に成に成に成に成に

大抵之儀を辨へし後身好む方Pのむらぶ部後
小も驚るも此Pより記する志をせむPの時方
林大子以P建ひく元祿年中 常憲院掾
某ニテ 仰付候に沖段等しくと服忌令相
定むる七歳未滿の小児共相牛にせ服忌終へ
當之掾所服をせしむる諸事一不及沖を
急しむるPに付は充中何處をいふるもく
それ死成はしとく大子以を辨令忌不Pの
くも辨成はしとく大子以辨令忌不Pの元祿

年中服忌令よ七歳未滿の人を服忌Pは
志何は候とお定むPの儀古來倭漢に服
制よ七歳未滿の人死去の時父兄親族其
為よ之服り候く之扱は殤とPは候有
此は七歳未滿の人其父母等のこめにせ
服忌P候も相見不Pは候水成はしむる部後
此中少は流き大子以以介氣を損ひて
左様之儀を辨りP候は儀礼家礼を初
歴代に服制よ流く七歳未滿の人父母

為りて之服之事の自成候に於て是
 常憲院掾沖定と並に只今左様
 院中建出る 常憲院掾沖制他令と殿
 候に介成候事の中中候に依り新井氏に
 又中中候に介成候事の中中候に依り新井氏に
 七歳未満の児に父母に為り刺殺之年
 殊に尚室に人をも其卯に族人に為りも總麻
 三月に服に長者に為り候事候に旨に候事
 沖初相と 上中候沖後と 且又元祿

令子長為君服制も不詳定並に群臣も
 之服に候に 又憲院掾乃沖為に服と定
 出志 天英院掾并松平兵衛守備後中中候
 沖先代に限り候に 故候に之は物御事
 身好元祿の令を沖殿に成候事
 批判に之に候に七歳未満に其父母
 代為り服あるに否と申候に候に外に
 服忌は坊中養に之に候に候に不詳定
 養に候に候に候に候に候に候に候に

沖代に國喪の時めくある服に日數内
台禮沖を急とあるはいつて就孝稱る言
建不好の但如何好は是を能勉は善ある
ら風あるはいつていつての禮を正しんを分
方とのい申す中の加私中の成禮を極とな
好の近世の家代服忘と申すの衰麻をい
彼不仕の常代台服とくをを分つて神社
爲よりを急と信る極成事と彼と心得
能を名実此礼を申後あるはいつての禮を急と

候に 初後淺くあるはいつて以後と古り
復つ申すれ母ある好はいつては爲不急と
國恤とく何事も共くは候は事殘念
よ旨好ある神社等々沖家事かよと
沖を急と申す 國喪に申すはいつて
それとおまも申す孔子傳羊に禮と書
と申すは急と急と申すは急と申すは急と
論をいつては天下後世に人其元を衆
て申す毀譽は喪をいつては急と申すは急と

新井氏と申すは中より新井氏と思ふ事
しる右に執一と書付か。此中以後日取
りて其書付と聞部及新井懐中より先
何と云く諸元中より心成と云く此中
先入と云く其存より何と云く辨精と云く
右に書付か。中より先中合意よりある
然と新井氏に議し。さて法をい遇不
中の端と聞ゆる以後に書し。此中
新井氏と云く是れ。此中建し。林氏と云く

通ふに成らるる。不使つ。新井氏と云く
又何卒しては極と云く。料多と云く。上
や。此中右に書付か。天英院極上
新井氏と云く。好と云く。海委細と云く。上
天英院極上。海委細と云く。人。此中
服と云く。海委細と云く。何極と云く。只今急
礼部。新井氏と云く。海委細と云く。上
か。此中。海委細と云く。海委細と云く。上
此中。海委細と云く。海委細と云く。上

水志よき事好むしこ日光 御名代はもと止
 中ははるる物 御免之觸るるは然るも作
 よ法者を 御免をうし 御度山終る事
 事は遠くはれん應子鳴物九行の事一はま
 と遠慮と守り中は是の道と中は取を定む
 来正月御儀初とて候と宜好むし 新井式
 新井は早竟不却合儀事 其不埒は中は
 先是親の如く 亦此事も新井式再昌後
 こ力よしく 西府は右に毎に此儀の後には
 御儀外憤の如く 七歳来未満の人も父母
 無服事 同被に被るるは 亦父母に御儀
 候か。とて候 同被に被るるは 亦父母に
 大に御大法を法に候り 亦成儀事とて
 守るるは 條に書付とて 亦それとて
 御度又新井式は 見せ候るは 亦是とて
 候とて 亦事は人倫綱常の紋不
 候との義に候るは 亦事は 亦事は
 教の害り 亦成儀とて 亦事とて不忠

不孝之喘失よ仕るべしと云ふこと、此所解は是
は、牟朝天下後世の患を弑すべしと云ふ意は
け方より、法は成りて、成りては、
之は、けしめ、一書出、一は、け返、其意、及
ては、る大巻を、調、回、部、及、と、せ、一、す、
大、子、以、り、又、せ、す、中、の、以、り、何、返、其、意、
其、後、一、使、も、不、取、の、妻、細、明、自、成、事、
大、子、以、是、以、て、何、も、返、其、意、
な、お、は、洛、蜀、黨、之、戒、あ、る、後、と、云、ふ、

け、下、の、も、新、井、氏、の、後、は、此、所、解、新、井、氏、不
入、事、と、す、中、の、中、途、意、
この私を、た、な、お、は、不、取、事、
け、事、其、前、は、正、徳、の、後、号、不、取、と、云、ふ、大
子、以、先、中、の、中、途、意、
辨、心、
此、中、の、其、事、分、と、云、ふ、中、の、中、途、意、
此、中、の、其、事、分、と、云、ふ、中、の、中、途、意、
又、十、日、以、後、上、下、一、統、に、給、は、る、と、云、ふ、

そこの憤りのある右の服忌の後に出ると相
見下ははる中の方には不字もく、乳毒もな
好む新井氏も是後とよ、小紙の何れも
志達一辨と物と相見下ははる只今も
相誤おもしろく、言部及下たよの言とも納書に
振り、私成ゆるも、王叔文と下堂と、執りて
て、成り勿論、同部及叔文とく、いそいそ
上り、新井氏と下堂と、用主とく、いそいそ
堂と、相と成るも、杖と、ぬき、いそいそ

おもしろく、いそいそ、料部はゆるくれ
か、振り、一人の六節目とある、荀目と、不
先、衆と、只今と、執り、聞見、新井氏
私と、いそいそ、いそいそ、私と、いそいそ

文照院様、清に就任の後、いそいそ、いそいそ、
後、いそいそ、いそいそ、いそいそ、いそいそ、
尚上様、いそいそ、いそいそ、いそいそ、いそいそ、
いそいそ、いそいそ、いそいそ、いそいそ、いそいそ、
引退、いそいそ、いそいそ、いそいそ、いそいそ、

ゆるむ小好の易の爻易也隨時變易ゆるむ
てのるの事と知不中は今日進をば辱し
と好事をとすしはゆる後辱しよし好事を
ゆるす下入の志は自分も好むしは油の
るぬぬの能く易進を君子の志しゆるむ
黨の字彼林の家といゆるぬぬの退く時
ゆる見幾而作不候終日しは人の志を
中入の進はけ人が好む時一は中入の退く
教母一おを好むぬぬの川退の地をぬぬ

是よりとす好むは 文照院柳沖任用た
ぬぬの志の先おも中入の古く一変人の殷湯周
氏し伊尹を公をとす用ゆる天禄を共
天位を共し一て人よ上におもおの事しゆる
ゆると天下し人服し一不中入の本多中好む
相殺しと指をけ人を男部友と因殺し
仲好むとゆる大禄をともむ 仲好むとゆる
は充中の方を諸事お候ぬぬの答はぬぬ
勿備氏人伊尹を公しはぬぬぬぬぬぬぬぬ

上も成湯文成るべくもそいふか^く賢人とい
大に立用時を指位とせし^り事しはる用よ
互不^レ付^レは新井氏に先表^レ入^レは^レき^レ勢
指^レ中^レの大方の指保身^ノ謀^ハる^レ神
是^ノ也^ヲむねい^ハう^レと由^ル一^ニて福^ニあ^ハひ^キ
事ハ智者^ク不^レ不^レ為^ル也

一 新井氏^ハ中^レの夫^シ 最初^ハ冲厚恩^ノ人^ノ間^ノ部^ノ友
始^メる^レは^レ山崎某と勢^ハて^ハて^ハ仕^シ先^ニ日^ニ冲厚
習^ハ流^ハお^ハ合^ハる^ニ生^ルに悲嘆^スと石^ノ通^ル出^ル

は^レ某^果中^レの志^ハを^レ方^ニ材^ニ流^ハる^レし^ル冲厚
も^レち^レは^レ也^ニ 冲厚^ハ中^レの夫^シな^レむ^レは^レい^ハる
前^ニも^レ冲厚^ノ流^ハと^レ中^レの^ハより^ハ一^ニは^レ夫^ノ某
中^レの^ハ夫^ノ指^ハく^レて^ハし^ル毎^ニ夫^シ 冲厚^ハ中^レの
祀^ハし^ル冲厚^ノ親^ハし^ルあ^ハる^レは^レ中^レの^ハ後^ニと^レは^レ也^ニり
始^メ終^ス 冲厚^ハ志^ハを^レ夫^ニ 石^ハは^レ中^レの^ハ事^ノ一^ニは^レ夫^ノ冲厚^ノ
中^レの^ハ流^ハ中^レの^ハ其人^ノ中^レの^ハ元^ノ曲^ノ深^ニく^ハ時^ハた^レし^ル如何
柳^ハあ^ハる^レも^レさ^レく^レあ^ハる^レ不^レお^レ勢^ハ 冲厚^ハ志^ハを^レ其^ノ後^ニ夫^シ
結^ハ句^ハ茶^ノの^ハ信^ハ一^ニは^レ夫^ノあ^ハく^レは^レ自分^ノ事^ノ也^ニり

に在成中の如く、事々新井氏、所窮
審少も張、思ふに汝始終、所任用、成
所然、意より、いより、新の正後、より、成の正也、
只今、より、いより、成の正也、
乃不、拵、成と、成好、

一 所葬、以、成、増、と、祐、天、和、尚、駕、籠、より、
所、城、所、去、園、と、一、所、免、と、免、和、子、新、し、成、と、
上、所、所、門、日、同、事、に、場、と、寺、僧、正、も、所、去、園、と、
系、物、所、免、と、免、と、一、常、憲、院、所、所、所、の、

増、上、寺、と、不、成、成、け、成、 所、葬、後、増、と、
所、免、と、免、と、成、中、去、の、同、部、及、新、井、氏、に、お、法、を、
新、井、氏、に、成、中、の、成、後、成、と、増、上、寺、に、通、と、
今、成、所、成、と、成、け、寺、に、成、成、 所、成、の、後、成、の、
台、徳、院、所、成、代、通、と、成、 所、成、の、後、成、の、成、
と、成、成、 常、憲、院、所、成、上、成、と、成、と、成、成、成、
成、の、事、と、各、成、料、成、と、成、成、成、成、成、成、成、
成、成、成、成、成、成、成、 成、上、成、成、成、成、成、成、
成、成、成、成、成、成、成、 所、成、成、成、成、成、成、成、

就其増上より後をいふも又 思ふはるは教書
としかるを成以後 上極沖成長を成はる
定る増上より上極を格するは 作付のまじ
夫は書付は在中より成るを成はる
上之沖幼稚を成沖を成はる 常憲院極
沖定るを成はる後を充中心を成はる
後志不承成はる 作付を成はる
其通沖を成はるは同くはるはる
沖を推以後増上を 傳和尙初めより成

右の類 沖定るを成はる 沖法事 勤P後不
能成はる 沖定るを成はる 何成はる
間部及何と相後を成はる 智教思を成
沖定るを成はる 増上寺事 大猷院極
以承既 沖之代上極は 沖定るを成はる
先と極首を成はる 思ふは 台徳院極
は寺より成はる 沖定るを成はる
沖定るを成はる 沖定るを成はる
増上寺一流を成はる 沖定るを成はる

か極成中及候成差不及是悲は以上と云津津
御指止り成法事と申候何の意もなき
候は法世法事と申候事と通ふ事候は
事不具候より申候事少く候事申候
指止り成法事と申候事候事候事
番人と大勢附主候事津津理候事
相持申候事と申候事と申候事と申候事
和尙右と申候事と申候事と申候事
作付申候事と申候事と申候事と申候事

役志申候事と申候事と申候事と申候事
五人と申候事と申候事と申候事と申候事
徒然と申候事と申候事と申候事と申候事
ふと申候事と申候事と申候事と申候事
何れと申候事と申候事と申候事と申候事
一と申候事と申候事と申候事と申候事
増と申候事と申候事と申候事と申候事
色物と申候事と申候事と申候事と申候事
急度と申候事と申候事と申候事と申候事

此月僧徒是と承ゆる御法事一々勤
多御儀之申ゆる事御申上り候と新井氏申
上り私事不足候御儀及い申上り同部及是候
一々申上り候事

文照院御沖御申上り申上り候事
と申上り候事申上り候事
新井氏申上り候事
申上り候事申上り候事
申上り候事申上り候事
申上り候事申上り候事

廉潔申上り候事と申上り候事
新井氏申上り候事
文照院御沖御申上り候事
と申上り候事申上り候事

同部との申上り候事
申上り候事申上り候事
申上り候事申上り候事

一 又申上り候事申上り候事
申上り候事申上り候事
申上り候事申上り候事
申上り候事申上り候事
申上り候事申上り候事

东照宮御誕生壬寅年

文照院御誕生

壬寅年

元禄二年御誕生

寶永七年御誕生

元和二年御誕生

正徳二年御誕生

加柳

东照宮御誕生御誕生

白石中御誕生御誕生

附合之事御誕生御誕生

一奉^事有之御誕生御誕生

奇瑞之名沙法仕御誕生御誕生

一同

先君御誕生御誕生

御誕生御誕生御誕生

御誕生御誕生御誕生

月先院御誕生御誕生

御誕生御誕生御誕生

御誕生御誕生御誕生

御誕生御誕生御誕生

御誕生御誕生御誕生

御誕生御誕生御誕生

天英院標由使より名別し遠くは 河城女中元
之を女中元より以下候は由表使元と申是
事をもつて候は又今多助の 月光院標
元人より女中とて表使より元と申是との
有と申す申す候は姑息候分礼候る事
候はと申す候はと肩と申す事候

一 林字士の候は邪説申候事白之候辨候
埒明申又候は 家徳公の御名系字徳の子
不直申候事候は候は候は候は候は候は

之と申候は徳子徳母と申候は候は候は候は
候は候は候は候は候は候は候は候は候は
及事不直候は候は候は候は候は候は候は
其の候は候は候は候は候は候は候は候は
儒者津村候は候は候は候は候は候は候は
申候は候は候は候は候は候は候は候は
度人百あり候は一兩元元候は候は候は候は
候は候は候は候は候は候は候は候は候は
候は候は候は候は候は候は候は候は候は
候は候は候は候は候は候は候は候は候は

とと末くして傷者か狼よ欲深き者なり成と
嘲し惣お尋つて色を以て種後を以て使侍と曰く
之を球中に入らうといふ先ず山守の事も不承以
事とあつて中程にさし惣お尋つ使侍の事と
辨らぬ由に作す

一
十四日十八日未下深見と新井氏宅に事會
あると云ふ事ある人の例に性從より少少御袴
着て御用意より井伊掃部殿及御が冠被
御具は探威の被り侍と見え繪巻彩も

新井氏相後より糸の物見え下は其分は中
より之用より糸の花繁と辨らば事一乳毒
お美より先日と御も海ら探何し用山と立
る中より御心と志しつめ繁末し結指つ中指
もさし山 殿を院探御時の事海らと色以
まして下お辨らば大事に控りし秘花辨ら
指と中より少少の物屋に立中程より中乃
少く探中より夏冬よりあふと中後よりしらふ
秘花辨らばと色強き色道と御りより

用は左戸紙に被し一色身よまをとりたる印に候と
と辨し介座に候したる物に只今しと
らけりとの事には先日保科肥後も後々御用
にはと上りたるおりの故に候也 歳有院様
御内御理候お勤中御方小笠原家と相尋
記に申し故案に書しとくは由考合しお小も
百二二冊に成り候被取し見下ゆを又書し
紙を折ゆるる家手はすりし文書付中ゆし
そり候し御柳おのしとゆめとて候也

被し一色身よまをとりたる印に候と
右に書しとくは由考合しお小も
志のたけりけの物に申すはとて候也
物と肥後も後々御用にはと上りたる
間部及下ゆを以候辨ぬ物に只今御方
し物と取し中ゆり紙のしと被し味き
表紙よく裏に合の布目すかこちりし
書しとくは由考合しお小も
取し中ゆり紙のしと被し味き
取し中ゆり紙のしと被し味き

ある友と存する威は後をいふより一トはるる
とのもたれりた極くくはるる中は其の
私中の志 文照院極御代御政務に後
に集りてありしは後には後修の事には
不承の如く後には後修の事には
御ありしは後修の事には後修の事には
思ふ所のは既に御ありしは後修の事には
天下に困窮は時に流るる節と後修の事には
御ありしは後修の事には後修の事には

況者別はくも後には天下に統一統流は
無相和はくも後には後修の事には
不承の如くも天下の困窮はくも後修の事には
天下に困窮はくも後には後修の事には
中は口入るは中はくも後には後修の事には
基をたはるは中はくも後には後修の事には
正思の如くも後には後修の事には
分は極くも後には後修の事には
時勢を合意不仕はくも後には後修の事には

唯今指西つとP事本勢方たあく外の事本と
手及びい不P山同部後日救 沖幼る塚
抱杖よむむはく時分色色くさPと 沖出然
ぬ振ふと釣一又も法務と百とせPとそな
何く沖俊武の何く山後俊のとPも舟ゆるも
沖幼る塚の沖俊とあけ沖舟抱す際とあ
ここのまへくさく申さPはぬ殺夫はた振よ
くつあここのた振ふ急勢よあひをそ運し
不事と心力とくは指西つと後、涕P事本も

むまへ答ふはさむ山をくす好むと云同部後
く山後と馬鹿水舟抱よ水ゆると成他事
山崎よりと答ふ其外山を中言いく山崎
山成りといふはゆと是も同部事とくた
目前の他事に目と山送るを以て解急
勤方山送らう一山P山木下舟傍か一海
く理家少くい不事本と山只人山山の中
毎夜の易者法とあさる水立 城山下
何角好くおろつた義く由山P山山私と云

夫之筋力之方、く大匠之班中、意の
清書、胡會と書、一よ、亦、事、辨、心、以、後、
と、字、亦、好、以、勿、偏、只、今、之、初、少、く、以、得、之、
毎日、法、在、城、舟、衆、以、爲、書、成、以、事、本、を、至、
極、ま、ら、し、め、り、と、史、と、以、く、事、と、塞、と、さ、可、
P、以、私、に、辨、心、以、く、一、P、以、以、以、以、新、井、氏、
P、以、以、以、以、人、情、と、不、知、一、以、支、P、以、指、西、目、
む、方、乃、古、平、此、と、P、以、以、以、一、統、よ、以、以、也、意、
と、因、窮、く、事、の、有、と、P、以、以、以、只、今、時、分、以、中、

方、有、揚、P、以、以、以、以、以、以、以、以、以、以、以、以、
今、病、人、よ、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、
復、か、と、く、事、本、定、り、た、ら、事、少、く、以、以、病、人、に、
以、以、以、以、以、以、以、以、以、以、以、以、以、以、以、
以、以、以、以、以、以、以、以、以、以、以、以、以、以、以、
今、以、以、以、以、以、以、以、以、以、以、以、以、以、以、
指、向、と、り、め、P、以、以、以、以、以、以、以、以、以、以、
を、ま、も、り、も、不、中、と、く、以、以、以、以、以、以、以、
通、以、以、以、以、以、以、以、以、以、以、以、以、以、以、

新井氏は在郷と申すに附換好の口人今更中
方一旦も此氣に入ら申し居る成社稷の遠慮
と申すものと立違ふもをと申好ましくいふ
能くは此氣を分り申すは度方のこと
ゆゑ新井氏に申すは跡ましく申言すものぞ
をと思はし居るも字力ありては不致成を
不字に云ふ死を後追討は氣と申すを
收むる不致成を思ひて申すは度方申すに
下申すに申すは此の如く申すに

新井氏に申すは如何と申すは度方申すに
いふに甲斐と申すは相子と申すは
昔は後申すは此成り申すの又を用不
申すのと申すに及不申すは申すに氣味
よき申すに 文昭院様より申すに御史
と申す歴代は古今の事と申す好知は度
方申すに申すに度方申すに申すに
教を申すに度方申すに申すに
申すに申すに申すに 申すに申すに

思ふはくも必所比直とてなほ金銀のく
う候より只今うの爲大買も 御茶
もあつてそのまゝくはせしめりし
御茶あるをて 御威光の如く君よ
存せしる一言もくも御用は事今こまて
夫責ると思ひおと好もしつち
是と承ゆる私に御意流ゆるは自分中ら
右様は御思ひたまはくは御其眼より候
おら事しる由はけの御井氏と色く

被金候の事 ありしは御も大方は御
義よは妻くは御紙よく御の御井氏
氣くせよくはをて好も先人の
候とおらる事御は是とをておま
くは御の御分はくは御の御井氏
くは御の御あはくは御の御井氏
是御の御あはくは御の御井氏
は御の御何候御の御井氏

一 権現塚御誕生土寅宗 文昭院御誕生

生壬寅年未也長六年七未年治世四年
宝永二年未年治世四年 冲他昇元和二
年辰年 冲他昇正徳二年辰年冲導師親
智國師七十六年未年冲導師祐天和尙七十六年
以日江戸に中慣事なるの新井氏に中
指現塚冲在辰四年と中後合不中是也
岡東への駿府に冲隠居を九年四年と
是中史に存する未年合一と後と好由
中苗十一款に中源古徳と看と見ゆ

中平より中中の中中私中平松祝中歌
歌よめと中中歌今そ人歌 指現塚を河濱
松城より中中史が冲勢昌を極い今よむ
濱松の着いそんそとい井中なる濱松の着と中
事と歌よよみ入ゆと中中由其歌

君代中の中里中濱の松の着が波をる歌
け懐帯と子初調ゆる私方源大の歌中なる未
法大遠の着より中中と見ゆる史が 指現塚冲勢
業の例と中中 上塚冲長久の歌中なる中中

紙の右に物語と申す事ありとも見え出づる字
に違ふ所は之れ乃前所記之流に白も乃
連歌など見ると好人の心受あらずよあむと見
申す事ありはあむ

養子とあり

日記一巻

申す事申す事申す事とあるは申す事申す事
申す事申す事申す事 上極に申す事
瑞に後六七事書か 以日 沖城とく取とや
いふ事申す事申す事 沖親様は沖離とて

沖不仕合一ツとく之れ子親申す事と入申す事申す事
不幸にしては何と申す事一向に不用と申す事と申す事
いふ事申す事申す事今時分人の心受あらずよあむと見
事と好感入の又申す事申す事 是れ目か方の泰平
此と申す事申す事油断と基とく劫と不幸と
左右と好の只大事に討ち危き候と申す事
能く申す事申す事申す事流石と好の今更感入の
大久保か加中後氣分滞食曾よつと申す事申す事
いふ事申す事申す事好亡に梅人の心受あらずよあむ

此中の所私中の主人の同族の所共其人とあり
懐き大に遠く好む只今時分秋元殿を
左根に承けし私を遣ふ人元へ好むと申す
と勿論に後には秋元殿の事と大に事し人
の所野村の所後いふと申す故に先祖の
名承りし人より自分の才は薄く不才
は法度より少く懐易く氣の毒に成り目も
成り成り人より好む事申す申す故に
此中其年齢より好む事不才
不才

悟りて此中の人去年一子病死今度秋元
右の所只今遠く不才の所監物殿を
此の所事疎かに先如何に極子
願ふ事申す申す申す申す申す申す
此の所申す申す申す申す申す申す
義の申す申す申す申す申す申す
後と押返す申す申す申す申す申す
所他界の所申す申す申す申す申す
一は極の所申す申す申す申す申す

加振に中少少の振りくはさくく人語に中少
より中少の事殊に外あり事なるは也るは
及は振に中少少の具負の危似る事と左
振に中少少の具負の危似る事と左
りし中少の振り及為りし中少の
清平事と中少の事と中少の事と
比振に及を人なる中少の事と中少の事と
中少の事と中少の事と中少の事と
其印の危不使に各なるは振に中少の事と中少の事と

たてし中少の事と中少の事と中少の事と
加振に沙汰の事と中少の事と中少の事と
及に好むし中少の事と中少の事と中少の事と

一 其後新法に成るは及右京を度俳諧とよく
記すし中少の事と中少の事と中少の事と

日記書や因公且乃せらるる

是に霍光の武帝成王と因公替は履せし事
を又とるゑりて賜ひし後武帝崩沛に時分
昭帝幼なる霍光の文是に詔補幼王の時分

右に畫し事と氏を記す作あり漢書に
見ゆ右京殿是より記すといふあり
ろく甚好し新井氏も好むといふ俳諧と好む
記すよく記すある桃書なるを合記す
桃書本し本人あく事白と号ありある桃書とは
あゆりし事あり只今世に板行し曰新井氏
多事ゆゆかくし名相陰とす相陰とあり
愛新井氏ありし記す武田女子お幽首
遺書本と事とよといふ事新井氏ゆ

俳諧とやめゆの字者詩文あり事又は昔の史
俳諧と好むゆ下喬木入幽谷とすあ
を以深田中あの記す詩文ある俳諧好む
はる承ゆるけ者下喬木入幽谷と好み果て
け寂逐電記ゆゆ新井氏昔れ俳諧
是記ゆありしゆ承とすゆ白炭乃
終ゆ

白炭也胡亥消く馬の骨 又玉子の終ゆ
いて玉子線く記ゆとくあり他を

けりある人こぼれは或人見物場と云ゆる下結
とぬきまもいふもの下結結りトとて粗考
よむ也ト云

まぢけりてはたかひのたかひのたかひのたかひの

下結のたかひのたかひのたかひの

かたは俄こころいふはたかひのたかひのたかひの
根子見下けりて人こぼれは或人見物場と云ゆる下結
こぼれは或人見物場と云ゆる下結
物と好む且氣象の繁と今も有るに相り

守好の 以上二條 癸巳正月廿三日書
正徳三年

けり坂井氏とて一は作は俳諧狂歌等
好む事ト人こぼれは或人見物場と云ゆる下結
他のと不詳ト云ふは又一等遷高木ト云ふ好
山眞眼と云ふ義理之精潔と云ふ體認と云
平生と云ふは或人見物場と云ゆる下結
たかひのたかひのたかひの

一 物價近日踊り旗本中国窮以て介へ俄局番
之元根之物所持不仕との多るるは玉に也

事ニツキハ武士方買求ハ物ノ代ト返渡不侍
ノ付与賣揚ノ價ト増ルル其利ト價ノ事ハ
ト江戸屋敷町金等ノ粗多無本ノ人別ト多ク
以二月諸本ノ賣外ハ物賣賣餘トト事ト
ク價も高く各別事トツキハ五ノ而ノ農民
等も分ク振旦有ク以今田畑作揚等ノ事ト
其價ハ増ルルす一トト利不足ハ其米
穀トツキハ諸物ノ價も高ク各別事ト次
只今津沙詰トツキハ米賣トツキハ京大阪

長濱トツキハ米賣トツキハ米賣トツキハ米賣
をたしハ物價ト減ルルハ江戸ノ價も
減ルルト事トツキハ花奢ト禁ルル陰約を
米賣トツキハ分限ト事トツキハ米賣トツキハ米賣
作ルル事トツキハ新井氏料等トツキハ
委細トツキハ事トツキハ不戸トツキハ
通談後トツキハ大方トツキハ江戸トツキハ
以今以何トツキハ作ルルトツキハ
トツキハ外トツキハ本トツキハ急トツキハ辨ルルトツキハ

一統地不_レ由_レ如何_ニ義_ハ加_レ柳_ノ政_ハ應_レ滞_ルは_レる
と_レ下_ノ民_ノ社_ニ及_レ不_レ及_レ如何_ニ極_ニと_レ變_レ也_ト出_レ來_レ一_レは_レと
ん_レあ_レ共_ニ其_ノ中_ニ一_レ点_分 清_元後_又志_將軍
宣_下あ_レは_レ及_レ修_事ハ_レ揚_並事_ト見_レ下_レは_レけ_レ人_礼
さ_レお_レ海_中は_レく_レ如何_ニ極_ニ清_初政_とて_ある_{こと}と_レ好_レ依
秋_元後_とレ_レ之_事ハ_レ入_レは_レく_レ極_母あ_レは_レ去_レた_{こと}人
よ_レく_レと_レい_レ極_ノは_レ好_レま_レる_後社_事と_レ見_レ下_レは_レ
百_一元_中不_レ和_ハ極_ハあ_レる_{こと} 清_為不_レ區_義は_レ及
そ_レ不_レと_レ只_今身_一は_レ極_と見_レ下_レは_レ是_レ也_之條_義

事_と好_レあ_レる_男部_及好_レ介_材力_と見_レく_{こと}と_レ是_レ
温_厚あ_レる_{こと}は_レ今_以法_老ま_レけ_レ人_と
文_昭院_時の_如く_推事_ト極_ハ是_レ也_之極_也
清_幼極_ハ右_と離_事不_レ事_ト極_ハ右_介事_トハ
先_新り_不事_ト極_ハ久_保及_レ氣_分あ_レく_レ川_道事_ト極_ハ
多_分を_よく_事と_レあ_レく_{こと}極_ハ是_レ也_一統_ノ志_のり
極_ハは_レる_{こと}は_レ大_名元_八人_ハ自_事ま_レく_レ食_けり_極事_ト
極_ハは_レす_{こと} 紀_國殿_事ト_レ事_ト極_ハは_レ極_清語_合事_トと_レく
由_極は_レ七_屋及_レあ_レる_{こと} 榮_湯敷_事榮_碗榮_入事_トと_レ求

諸君の心をなげけ海濱の如く自分も樂と爲す
世好弊と云ふ所の乾支取の事此の世に先は及の
畧中の社元及回部及あるに因社元及の冲濱
代の家は流る法旗本の存入と云ふに法大各に
守りしものいふに人別る人切に成るに去其十七年
よめ勤し守りしものいふに去其十七年
先自に松平伊豫及を充中言物と云ふに受納
つるに其否との余義と云ふに社元及今及
増上も其世の成るに人成るに成るに成るに

諸君の心をなげけ海濱の如く自分も樂と爲す
返す所の返るに成るに成るに成るに成るに
中の随分潔白と云ふに成るに成るに成るに
及人等賄ふ沙汰に成るに成るに成るに成るに
此中と云ふに成るに成るに成るに成るに成るに
ありしものいふに

一 柳沢翁濃も入道保心なるに成るに成るに成るに
成るに成るに成るに成るに成るに成るに成るに
と云ふに成るに成るに成るに成るに成るに成るに

大目付横田傳中書と申秘密申用事 作付
申す可事なりと 沖新令事 作付書付と
先日見申す二換立と 申沖停止江戸申加籠
六百換立と 三百換立申不申如 隔と 申女
監停止是等と 留事人拂底に成成る 總本
申之程依仕の如 控氏を禁せら 申之程に
之外小と 申之程に 是不申の 申女沖割事
と 事申一風俗と 申之程に 一限と 申之程に 百一
隠事申之 申偏申事 申之程に 言事と 申之程に

見合流事と 申之程に 言事と 申之程に 傾城仕の
亥子一は 彼境江の如 自然と 申女に 成成り 志
之と 若と 申之程に 上服と 申女に 成成り 志
妻嫁仕の如 申之程に 申之程に 言事と 申之程に 油
申見申之 申之程に 申之程に 言事と 申之程に 新井氏 杯
色助と 申之程に 申之程に 申之程に 言事と 申之程に 扇と
梅と 申之程に 申之程に 申之程に 言事と 申之程に 申之程に
同敷と 申之程に 申之程に 申之程に 言事と 申之程に 申之程に
申之程に 申之程に 申之程に 言事と 申之程に 申之程に 申之程に

なると遊付お下り遊り下所旗本元祐翁羽
二重の上へ衣服不承成山振成 所紋付を各列
その外を不承成山倍長色翁羽二重へ外不承成
是色も一人分承成山へ各列へ成度志法書
既記 仰お福勝子よよき候そ方の中記
との成りく下中上なる上なる所 結成山へ
其事へ御心を事の上より一通信約成候
仰おなる成りく下中上なる上なる所 結成山へ
之下事も出成りなる結成山へ成候成候事も成候

物の上中下なる其上より一通信約成候成候事
仰お成候事是色一通成候成候事成候事
成候成候事是色一通成候成候事成候事
将軍 宣
所相御所成候成候事成候事成候事成候事
結成山へ成候成候事成候事成候事成候事
之人主目なる所成候成候事成候事成候事
柳子成候成候事成候事成候事成候事
文昭院様成候成候事成候事成候事成候事
成候成候事成候事成候事成候事成候事

是皆 文昭院極許是徳也と云好其の上并伊
との秋元及同然及彦潔正志成は人より中
天下に後教母愛を好し并伊及祐法老中何
写教及志つて中にある諸事 文昭院極許
に極子に少くも相替候にせしよ 是とは殊極
事又その心を好まじも同然及何の心も極
感の中候に考志百行のふと中候今更極南
中同然及正親父の正考人の中只今見中
日衆 御幼主極御捧護に神且又美棧氣と
付中候有天と知く有也と不知と中毎
心誠人を感の中と相見中は久長元何茂敬中
新井氏久の親承る能事と聞中は有為人
各別出来も有しけはと一ある事極中候
感令候に有る候に元色そりく 感化は斯
先日は後人由余候に事由る河原中候
或人を強引懸て奉りし人働に之極
も中候に河原中候に之才智之解り
は此書中何とて正志成は人より中

作付のり相息働もあつた某は人々を以て
一事ありて先以て法事熱を以て 作付の
時分諸役人亦上階のまじりて法事有る者
坊に色又も亦も色不系人のまじりて人
斗不系人の相いへりて存る者今も又も
有りと目利仕の事と人々を以て是亦
恒成し極に切に執の付つた事と
子遊の澹を減明と目利仕の事と井伊
是も常人のまじりて相いりて亦も

と有る新井氏に 常憲院極代松平
威勢の中は事と正月年終礼多の井伊
例兼外門の儀は役を打つて二回次と志出
張ある禮礼礼と志出通し不中井伊
屋敷外門の儀は中門ありて志出を以て
ては志出の儀は後で形得ると時分井伊
との縁共の儀は志出の儀は志出の儀は
義濃守及つた事と人々を以て是亦
はる十月日と有る者右儀を指すはるか

新法書後平系の二平法を以て極とて家在中
また中平公其派家元と云はる井伊及中平
二かたは区々之と云ふも又中平右平極
並に又その年三月十日五日と云はる極
の事は又十日五日の如く流書後平系を以て
還へ通の事の中平公極の流法今以て極
中平は同法失不中平と云はる徳川の流法
な好の同法は事と長なる事と云ふ事
この事極の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
二條癸巳
三月廿八日書

一 江戸表流法極の事と云ふ事 新法書後平系
井伊流法中平の事と云ふ事 新法書後平系
の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
文取院極中平の事と云ふ事と云ふ事
去年十二月新法極の事と云ふ事と云ふ事
書付し大要と云ふ事と云ふ事と云ふ事
よく新法極の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
其謂ある事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
此の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

此病人を療治はばゆくもくも病乃ち成る子細を
伺ひしらべに見申はるはよ業方とて立し業
若く病源とつとむるに法も不及してみ
つと業とてあつたは病の事にも病
勢をよめしける終は法 射の事よと
ふは病に彼書けしと見はよ近年以来
諸物之價もく成る子細と申ふは合銀
果りの付る諸物之價もく事二
を来し風俗物身に業を好しるるを用

相増ふもよ諸物の元價もさく成るは
賣物もく價もさく事二
買來もく事ひ物代とて海あくる物
賣物も物の價を海はるる利とつこのい法の事
は当地の産物所産未数多く成る人別と
産物も付る法もく入來物も賣物
と事なるは其價とて成る由は事
当地の俗とて不ふ及はる農氏等と
分し事なるは田畑物等と事

其價と侮いふ事して其用不足の原米穀
と初之徳物の價をくぬは世に事一 次津地
法て有るは或る一三京大坂長崎と外を國し
たは初におるは法ある元價を減しは法も
いふ苗地の價も減すくぬ事一三島
者と禁一 條約とせしむるは法大小を
厚意一 事修くは振よる 作ある
事けきとて大要しはる果おはるは
心いふおは 價をくぬは世に

おはるしと増多く其病の長一 米の事と一 穀
一タし買ひぬとくは遠國法を行
中法ある元價をたははるは十年
米の事と増かひ價を一旦減せはる事
とるはよるは法ては次は又風俗といふは
る事と禁一 條約とせしむるは法もその
風俗の病とて買ひぬとて其の事と
とるは法てはくぬ事とて其の事と
愚好し及ぶは法物一 廣増かひる事

とて端々といふやうに
其大端と云ふ事
ふたつある事
けりて
以後但天竺と云ふ事
沖政務
そ大い
沖政務と云ふ事
下より

はくは
本
上
沖政務
文昭院
と云ふ
士民
と云ふ
何の

其成は後し事志論するも及つては其
懐少うはは取た未思好し及び其法は
價より成る大端と挙はる若く類と云ふ
下はもち記し又清沙法とて其事たは
付紙よりト云ふを以て入る好事其に
沖政勢よりのて法は價より成る條

一 金銀の數多し成る事

近年以來世の上下沙汰は金銀の多し
りよ付る法は價より上りてはト云ふは

書付しも想しては果多き物も下はる少は
物に少くは事よと志るは果好はる金銀
と又物に其數多しは法は其價は
法物よも事よと志るは但金銀の數多しは物に價より
りよは價より成るは我國は十條別地東南西北
限より成るは國よと志るは他は
色より數し限より事古今は同定は
え秘は天下通用し金銀育りのは數倍し
はる當時は下はるはのよも是に入流りは

買求ひ人の数に首より倍しゆても諸物に数に及ばに
そ限りよの外にお取らざるはかかぬはるは法物
に價年しよもくは取らぬ事是又定たる理と
好む苗付の米に價年大飢饉と申す時の價と相
同くゆと申すも乞食非人ら取らぬもお取らぬ
を以て是を重報の数多く成りし下候し志の
お入流の事一相量らるるははは事し子
細と詳し編しゆる事長はゆるはるはるし
と一箱く先大畧をあはるは

一 諸物に運上と申す 石上の事一附長等表高賣
し法をば及ぬ事一法物の運上と指しゆる
は各に賣おは物に價の中より指しゆる
金銀と申すはゆるは計ゆるは其價の場なる
しゆるは白論しゆるは一物に價のゆくはゆるは
つてして百物に價のゆくは謂はるは中書
付のゆくはゆるは運上と申すお取らぬは法
物に價のゆくはゆるは格は各お取らぬは
文昭院稼所代始運上と申すは河信止の場

法ある價既なるは成りぬる事なるは故に
して其價の減るは極の物と云ふは凡法も
價一方多く成るは故に元の高くは抄くたもの程
くはるの品は例はあり 大地震大なる事の方こそ多くなり
はるもの價も減る程は事あり
如記長寄表高貴は法改りたる白菜は其
とくは薬種なるもの多くて廢物に價はる
成る事其大なる津運とていひは記し
はは衣の事し子細なる事多くはる詳
はるは被るは衣は人界とていひはるは

法廢

一 大錢と稱するは事

大錢は其の盛なりは事なり 文昭院極
御代は成るは信止し事なるは故に其事の害
を縁うは如極なるは故に 御料は國々と地
は事と御用取は職人町人御拂はるは事なり
はるは不及御沙汰なる御勅定は御沙汰
は事とおぼはるは是は事なるは事にして其價を
増かすものも有るは

一 各地沖倉より納りし米を穀減し給ふ事

昔より沖倉より納りし米は数多くあり沖軍用
し使事足らざるに付沖切米し奉多
く沖米を貯下しより沖切米を計
分り必ず賣米し價を高くせしむ事
以米沖米の穀減しよりして沖切米を貯
多くと沖倉より下り給ふ事にて沖旗下し
今も昔も米を買求りしは沖切米
し出給ふ事必要なり價を高く奉り給ふ

自今以來は幣改りしに及ばず各地米穀の
價何れも減りし有りしに及ばずして万物
價も米穀も亦して法に乃ち價を不
の沖倉より價を貯し給ふ事にて
穀は法に納りしより下りし事にて
沖料し沖政法ゆりし事

沖料し地を國家の出入りし給ふ事 沖代し
沖法を詳し給ふ事 沖米を及米を
近年以來代官は市中と持替し人の心

した相違—以て其政勢—其意—
 す支配—亦と改めると支配—地を坊の以て
 成すのよする其政勢—いんとあらしむとふ及
 こそ下もふとねお勤の由事—名を店屋外と
 べきと心と通—我々—うらむ事—の多
 なる者其家—富—以て農業—の事力
 を用ふるも—不日—に改め—行誼—共ある事
 事—中事—はく—又—の
 一すれ—油と持—ある事—の事—

中事—の事—男女の事—人—の事—

年—の事—

 堅く—の事—の事—の事—
 ち—の事—の事—の事—

小の事—の事—の事—
 中事—の事—の事—

一 御城中—御事—請—其—
 徳—御—役—

御—始—御—
 御—御—

御—御—御—
 御—御—御—

徳大名に納入する教を不_レ知_レは是_レより_レの_レく
 徳國の士民及困窮_レの_レに_レあ_レは_レ苗_レ地_レと_レ初_レ免
 京大坂の町人亦乃_レ借_レ金_レ買_レを_レ爲_レす_レ公_レ事_レ祈_レ認
 也_レ且_レ數_レ多_レく_レ成_レ牙_レ世_レの_レ風_レ俗_レも_レ又_レ破_レす_レ公_レ事_レ

 此事は_レ成_レる_レに_レ徳_レ國_レの_レ風_レ俗_レを_レ行_レは_レれ_レ借_レ金_レ買_レの_レ由_レ也
 とも_レ略_レす_レは_レ公_レ事_レの_レ由_レ也
 公_レ事_レの_レ由_レ也
 改_レめ_レる_レ事_レと_レ初_レめ_レる_レ種_レの_レ形_レ法_レお_レな_レす_レ事_レ
 公_レ事_レの_レ由_レ也_レと_レす_レく_レゆ_レの_レ由_レ也_レ

一 亦_レに_レ沖_レ成_レす_レ事_レ
 其_レ家_レに_レよ_レく_レ沖_レ殿_レと_レ他_レの_レお_レ沖_レ儲_レ其_レ費_レも_レも_レ
 此_レの_レの_レ由_レ也_レあ_レは_レ諸_レ大名_レの_レ物_レと_レ公_レ賜_レの_レ事_レも

又_レ其_レ費_レを_レ以_レ不_レ少_レの_レ由_レ也_レ

- 一 上_レの_レ事_レも_レ物_レ共_レの_レ事_レ
- 一 其_レ以_レ一_レ位_レ極_レの_レ事_レを_レ以_レ物_レと_レ始_レめ_レ 昨_レ未_レ極_レの_レ事_レと_レ是_レも_レ不_レ及_レり_レに_レ沖_レを_レ爲_レす_レ人_レの_レよ_レく_レは_レ物_レ共_レの_レ由_レ也_レと_レ其_レ教_レ多_レき_レに_レ由_レ事_レと_レ由_レり_レの_レ由_レ也_レ

 是_レ亦_レ又_レ沖_レ儲_レ用_レを_レ以_レ事_レの_レ大_レの_レ一_レ事_レと_レす_レく_レ有_レら_レし_レ由_レ也_レ
- 一 徳_レ大名_レに_レ常_レ例_レに_レ介_レ献_レと_レ物_レ共_レの_レ事_レ
- 一 其_レ事_レ又_レ徳_レ國_レ士_レ民_レの_レ及_レ困_レ窮_レの_レ事_レと_レ一_レ階_レの_レ由_レ也_レ
- 一 徳_レ大名_レ火_レ消_レ復_レと_レ亦_レ亦_レの_レ由_レ也_レと_レ多_レく_レ有_レら_レし_レ由_レ也_レ
- 一 其_レ以_レ亦_レに_レ徳_レ家_レに_レよ_レく_レ人_レ數_レと_レ多_レく_レ有_レら_レし_レ由_レ也_レ日_レ備_レの_レ由_レ也_レ

云多くやとひ並或は町家と借或は屋敷と買
ゆるそ敷をとりて並其外火消の法に
具と祀り提燈燭等に心とて費おほく
いし

一 苗地町及多々成事

古来職人所入町を成と持はし利徳あり
極よん成事大指^{おほ}得年生類と事と祀り成
よ公役と物入多くおほし店賃を増ゆる費
とつこのいふ其利古来のまを減し又なる

火災も借屋他におし事をも叶ひ難く地代採
り事少く成事成りて其利薄くはる費拂
い並ふを年此風俗に種々物入採り事
しおおし近海以来法用取職人し有徳と成
半と成事なり是等し事の内代等しも價
なりと論せし家屋を買い求め又と成事し者
しと買米はしおと成事し賣券もさる成事
しあり店賃も古来の如くには減らさ
其店賃は高く高費はるると成事し者

店賃後の價と増加の事と相関の

一 或士屋敷の事新町多くと出立の事

此事は中々書付の相見の但事の子細を
詳に考ゆる古文を讀大急と始めたる屋敷の棟
敷も不多の事又十八七年以前に大急事
後指の焼失の時の為と中屋敷の事と出立の事
読家中に戸籍の人数も相関の極に成りたるの
事と云ふ事の所使くはるる屋敷の敷と相関
又けさの枝持の料と云ふ事と云ふ事と云ふ事

ふともおまゐる次第の屋敷の敷と云ふ事と云ふ事
一ツと云ふ事と及ぶる大急の爲と云ふ事と云ふ事

沖城通の此屋敷を福して他に移すは此事
出来ぬ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
屋敷の事を云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
江戸の色地のおおたる屋敷の事と云ふ事と云ふ事
沖城の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
屋敷の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
ゆゑに此の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

徳物ノ價漲也よるべく成来は子細と云ふは
よき事ありしに又是等の事なるに後河内
清は為よるに成るをと存はるよ

天災よありて徳物ノ價も成る候

一 南地方ノ火事ノ事

火事ノ時より買ひかへるに人ノ復たも他
の物も米も材も高き候也
價も高し候也
復たも作の意候も米も材も高し候也

此の如くは波是令て物ノ價も高し事と
増しよる候も一方も高し候也
減し高し候也

一 大地震 箱根荒井 長崎等の所當候事

此等世に大變ありしに 此の所物入るに

徳大急御自傳ノ人数も多し公私ノ其ノ量も不

知あり

公私ノ費用候也 傳ノ事ノ所當候也 傳ノ事ノ所當候也

一 京都火事ノ事

京都火事ノ後徳物ノ價も高し事 南地

火事ノ例ニ同シク但認ルル用ルル
京ノ物價多ク且ク京ノ物價多ク且ク
其貴天下ノ及ル事勿論也

一 大坂ノ湖ノ事

大坂ノ湖ノ事
大坂ノ湖ノ事

大坂ノ湖ノ事
大坂ノ湖ノ事

大坂ノ湖ノ事
大坂ノ湖ノ事

一 風俗ノ事

一 御旗ノ風俗者ニ及ル事

御旗ノ風俗者ニ及ル事
御旗ノ風俗者ニ及ル事

よらるるつり少と場かつとゆものいそむれんこと一
手れ入るて上の公役よきつりいし下家従を扶持
し中の親族傍家への付使を初め衣服飲食住
不意材等々用と足し事共の古来所旗
下中多しありし中陳所と洛ありし
後府中付来を所所會野とと事一
よ二夜を二夜ともいひ給付用と事共の
貧窮しゆとて所共公勤意の合とていふ
ひげ後 商家の所家同厚くはるる人印の飾

之し毎事よける実と誓しつるはるれに
寛永の中改より一倍し所加増とて不法合
とて下所合とて事 作付の事共打續
て且し又徳久と子息合とて所番入
るしよなる是よりして所旗しと同俗
其のありし事と好むと分と事とも
おまのりて四十年の久と殊とて事共
よまのりて近年よ及はる事と價とて
此徳とく價も又高くはるる物と所地

一事御長久ありしとき基くははなれし道年以來
の如くは御所の事とてあつては御所ありし事
は御所といふもは侍る方の 御家風も先果の
御所の事いふも天下長久し御祈禱もあは
す神の御事事とてあつては

一 御旗の御中御地もくは連の供へ忠と御め
或は御役の御に御使の侍る遠くは侍り人
数多し成り事

御軍役の御さくもあつて又御所の事いふは

午後御役の御に御さくもあつては御中
寛永八年九月二日は御江戸に連の人数の御
とて御所の御さくもあつては御中
連の御に御さくもあつては御中
御抱の御に御さくもあつては御中
御所の御に御さくもあつては御中
御所の御に御さくもあつては御中
御所の御に御さくもあつては御中
御所の御に御さくもあつては御中
御所の御に御さくもあつては御中
御所の御に御さくもあつては御中

其魁人をも多し出ず事一不令道中宿るの爲少と
不互事をも有しある是等ノ教ノ實ハ一物互連
其何事ノ困より立下りしや夫ノ張帯ノ意及も
衣生ししノ内野也一ノ大勢ノ志ヲ海包つて其
事ともいつ天下ノ人の存亡之不為あつていつ人
熱して所旗ノ中流中民を是れ事トあつて天
下此人ノ沙汰せし事トあつてそ身ノ誠度
のこもあつて一と一洲感も薄く如海ノ一
つ有るは是等ノ事トあつて一糸と錦とあつて

實もあつて事トあつて 尚家ノ所家同に相首と
一ある事トあつて教つて寛永以來ノ一
如くたつて一中一たつて一中国とあつて一
家從つて一海ノ一沖是等ノ一入一とあつて
有るは一仕方トあつて

一 或家方トは仕方ト一等ト始也 町方ト一ト一
男女ノ衣服等ト兼ト及はる 尚地ノ風俗ト一
ト及はる事ト一

一 仕方トは中ノ書付トあつて一は一風俗トあつて

半條、子細なる事、此年、今、あき、採
中事、ち、ある、衣、被、う、敷、と、見、合、く、直、極、は、は、り、
ゆる、あ、く、米、し、ま、し、は、物、た、ま、し、は、孫、の、元、録、家、永
く、守、ら、る、事、下、の、物、た、形、成、の、事、た、ま、し、く、拂、物、ら、と
中、の、る、と、物、の、恰、好、の、り、と、あ、物、の、う、く、中、の、り、と、又、出
は、く、夜、に、同、く、物、を、見、用、料、程、は、は、又、百、連、の、志、も
是、若、く、の、ら、ぬ、物、の、事、た、ま、く、家、後、の、と、せ、の
元、も、有、く、し、と、其、家、後、も、又、賣、り、の、り、と、と、事、と
み、く、と、事、と、其、物、を、買、り、の、り、と、高、費、の、り、者、と

有、く、は、衣、下、の、物、は、入、あ、り、事、た、ま、の、り、と、
乃、衣、服、以、て、外、弟、藤、ま、み、の、り、町、方、の、り、と、
男、女、と、又、是、の、准、の、り、と、年、以、来、と、此、里
女、の、給、服、と、と、増、加、の、り、の、り、是、等、の、り、子、細、と、可
為、と、一、為、の、物、と、け、事、と、此、風、俗、の、分、と、
と、の、り、と、不、つ、と、の、り、と、用、儀、と、と、の、り、と、
つ、と、の、り、と、但、買、取、の、り、中、以、も、お、け、の、り、事、た、ま、し、
徳、大、急、お、は、し、自、大、下、馬、の、り、と、此、衣、被、を、剥、り、
物、の、り、事、た、ま、し、由、ゆ、り、と、者、の、り、物、後、を、取、り、の、り、

一 近年以來現銀安貴より事おある即の
之者いふと如事

之四十年来世の人不勝自事たよ有る掛
たよと海し急ひよ有る掛賣とト事た新流ひ
貴ひ者も益々成積し強ひよ及ひ是後益々
始るは事と仕出しよ下よと價も安く又買物
不業自者の為よ一軍し事しきけ為貴
及よやるとおあるその即の物よとけ事多くとお朱
ひ是買物事のん安くよ有るおのつし買

求ひる用ひ人をも多くとおある世は風俗も業も
よ成ひは吉衣後し物と始る見ひおとと返振る
も昔れ物よと見えは益々減りよ成来
ひ是又卵と飾つよ有る因に実めき謂ひる
げ事よのひそ元のおくし買物仕ひ者
のすまじひと減しひるよ是おし事言
貴おし物し價も減し業ひ何事し有るも
正しし事よ有る

一 近年以來現銀安貴より事おある即の
之者いふと如事

と
とて代るにトとふまゝと互に之を競ひ
あつたといふ風俗のつ子れ町人も移りてを害する
事悉くその如く可くいふを厚に米の風俗をやつ

此事
去年の秋を以て米の輸入米の値は炭油の便日と云ふべく成り此及此
候にその好南風吹ゆる一日に米の値は二万俵と云ふ候に其の値は
金座より二万俵強府に二万俵九千の値あり候者共方、其の米を俵たして
買取の候は是よりして米の値は炭油の便日と云ふべく成り此及此
候に二事、一は米の炭油の便日と云ふべく成り此及此
諸物、便るべく米の値は炭油の便日と云ふべく成り此及此

一 今年以來俵強に種に沖谷ト事多々此候事
運上又々沖谷負るとト事と初め徳守徳社
秋事種に数多々いふ事あり候に徳守徳社
諸物、便るべく米の値は炭油の便日と云ふべく成り此及此

念人数も多々に入付候とト事と云ふ候に
とて屋敷の材用と云ふ事と貴い事と云ふ事

一 高貴人乃石と云ふ人数増え候事
近年武家方毎町人一人に物と物運ひ候事
を始にひ有る物を一高貴仕候ものも將軍に
為候者と分限お癒し高貴人一人に石抱と云ふ候事
高貴人より其の石抱の給合又ハ衣類候
米の料と云ふ事と貴物と云ふ事と云ふ候事
高貴人より其の石抱の給合又ハ衣類候
米の料と云ふ事と貴物と云ふ事と云ふ候事

五人七人等寄寓仕はるぬ所とて、
け等しく暮れん方とんかき、
ぬのを壬午年暮る人しす、
けの先よあゆる世とん安く海はる、
かぶ龍の壬午二丁立龍事

二二年前とて駕龍教の子夜とて、
龍かぶ龍の先よとて、
きもよ修らつく、
まて龍の男女二丁の

龍とて、
龍人のあふたるく、
龍の先よとて、
龍の先よとて、

一 壬午の先よとて、
古来とて、
間とて、
みゆを壬午の先よとて、
子朝の先よとて、
敷とて、
八男お坊の先よとて、

孫孫兼食以之介義麻氏事たましくゆとトク
け事始々、沖用初、徳家此用水、町合、振舞
ふとト事、よもり、お事、此種、只、徳、社
よ、小、芝、居、ト、も、の、も、西、こ、よ、お、身、け、印、に、又、背、の
苗、地、少、く、水、之、及、公、ら、ぬ、子、抱、女、を、の、教、を、舞
の、是、始、る、け、等、く、事、長、の、る、を、世、の、社、用、も
費、一、風、俗、を、も、や、あ、り、の、あ、る、よ、め、く、ぬ、事、乃、こ、り
ゆ、是

右十二條皆是風俗よりなる諸物其價をく

成、の、事、た、よ、る、け、俗、こ、ま、の、事、た、も、有、く、ゆ、を
先、け、爲、大、め、ら、ゆ、事、と、好、ゆ、沖、政、勢、よ、の、作
事、た、ま、上、に、い、こ、れ、思、ゆ、事、改、り、ト、ト、事、
幸、好、ゆ、風、俗、よ、の、ゆ、事、た、ハ、於、吏、沖、金、並、こ、ト、
よ、ま、く、或、家、方、町、方、在、こ、の、沖、割、禁、た、り、て、ハ、子
ひ、殺、く、こ、ま、こ、ぬ、た、ら、ゆ、沖、政、勢、を、い、ふ、事、ゆ、い、て
之、士、民、乃、風、俗、改、ゆ、事、も、か、く、ゆ、く、徳、物、の、價
も、減、く、ゆ、ゆ、の、こ、に、何、く、す、沖、政、勢、を、世、ゆ、ゆ、
事、新、く、つ、ま、こ、ゆ、を、天、災、よ、の、ゆ、事、こ、あ、る、ハ、

一 一
一 年號辨
一 國表正議
右二部別冊字々

二月十日

己
一 年號辨
一 國表正議
右二部別冊字々

